

姓名判断と其運命

特260

649

×  
複写

368

373

6 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



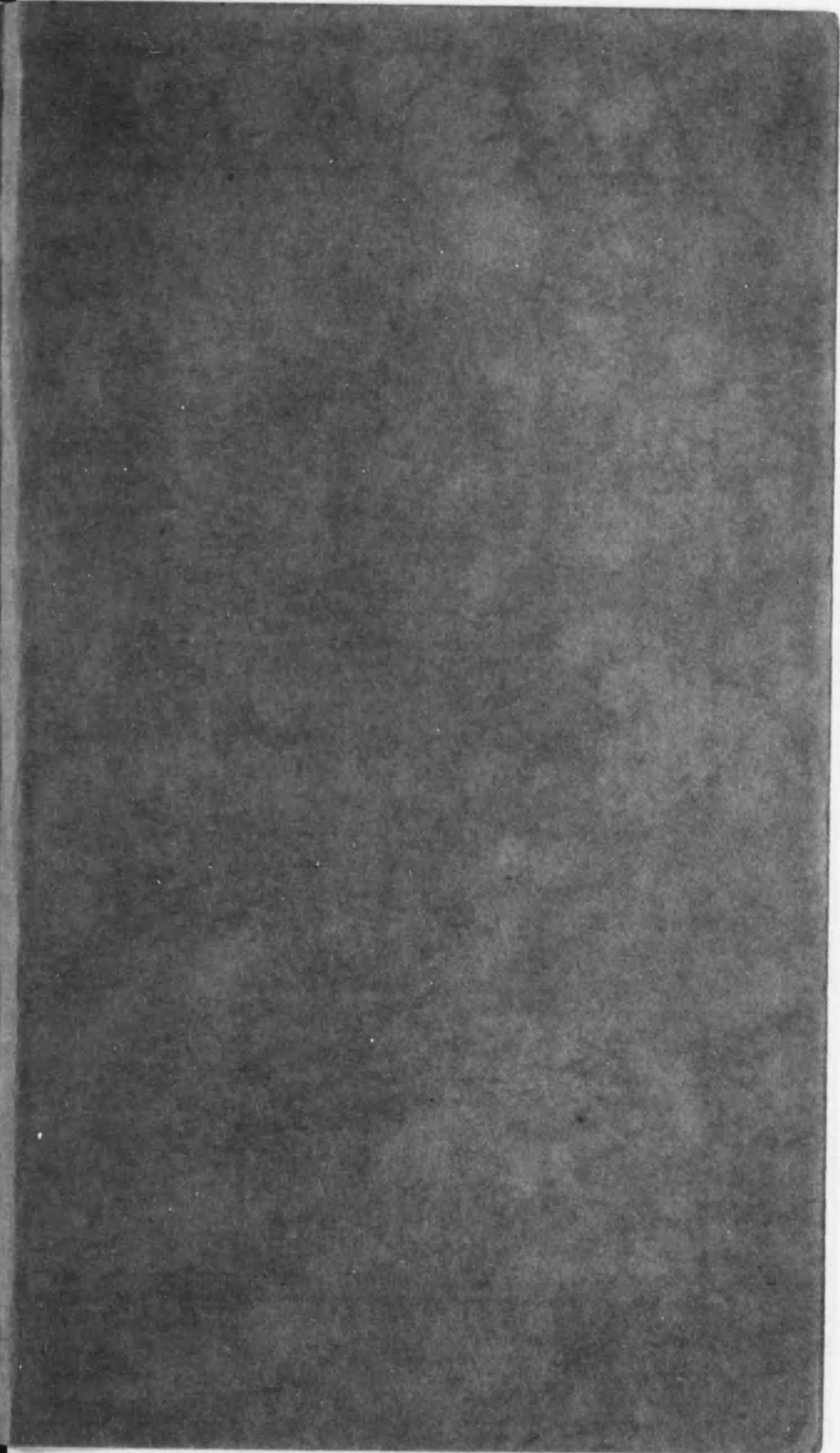
特 260  
649

高島易断所本部編纂

姓名判断と其運命



神靈館發行



姓名判断と其運命目次

第一章	姓名考とは何ぞ	一
第二章	命名と改名	三
第三章	天海僧正の命名考	三
第四章	四柱推名の基礎	二〇
第四章	字劃數の定義	二四
第五章	姓名と意氣	二五
第五章	五氣の配合	六四
第六章	觀相の實例其二	五六
第七章	天地の配合	七九
第八章	乾坤の組合	八四
第九章	名と合姓名の運數	八九
第十章	鑑定實例	九五
第十一章	韻鏡の命名に就て	一五

目次終り

# 姓名判断と其運命

## 第一章 姓名考とは何ぞ

これより、姓名と運命の關係を講述せんとするに當つて、其順序として、先づ私の立脚點及び之に對する私の意見を一言したいと思ひます。

私は、姓名運命觀に就ては、おおよそ三種の研究法を調べました。

第一は、近頃最も流行して居ります、意義と、天地と、乾坤と、五行と、名の字劃の運數と、合姓名の運數と、この六個條を憲法として、之に依て姓名と運命の連鎖を求めんとする方法であります。現在、澤山に世に出て居ります姓名運命觀の書物は、殆ど一切、この法に立脚したものでありまして、到る處に何々館等と稱する看板を掲げて、鑑定判斷して居ります者も、亦殆ど悉く、この法に依つて居るのであります。

第二は、易理を根本とし、文字と人との相生相尅といふ點に根柢を置いて、乾兌離震

巽坎艮坤の八卦を以て取捨し、之に加ふるに、五音と五行とを配當して、以て其人の姓に應じて命名せんとするものであります。

第三は、その源を梵字に發し、佛敎を根本として之に五行を配當し、其人の生年月日に依つて、文字と字劃を異にし、文字は、凡て「廣光韻鏡」に取つて命名するものであります。これは相當の教育ある者でも、「韻鏡」を學ばざれば、命名する事が出来な程、難しいものでありまして、始め、弘法大師が主唱し、秘密として眞言宗に傳はつたものを、野州の盛典といふ人が出版したるもの、名と印判とに就て、説を立てたものであります。

以上の三種、即ち第一の法は、其人の如何に拘らず、其生年の如何に拘らず、六個條の憲法にさへ依れば、名を命ずる事が出来るのであります。第二第三の二法は、人と文字と五行とを連結せしめなければならぬので、私の見る所では孰れにも一得一失はあるやうに思はれるのであります。

私は、以上の三種の、夫々の性質なり得失なりを説き、更に私の實驗より得たる卑見を述べるつもりであります。

## 第二章 命名と改名

講話に入るに先だつて、姓名といふものに對する私の意見を述べ、兼ねて、或る一の問題を解決して置きたいと思ひます。

その問題とは、改名といふことであります。近頃、随分奇怪な説が行はれまして、名の惡しき人は改名せねばならぬ。改名すれば、直ちに運が開けて來て思ふ事が一切成就するなどといふ、途方もない事を布れ歩く者があります。或人が私の所へ來て、失敗と成功は凡て姓名の善惡にある。その證據には、姓名の不完全であつた人が改名したら半年ならずして大成功をやつた。又、貸金もズン／＼取れるし、娘は良縁にありつくし、何も彼もトン／＼拍子に良くなつた。不運な人は、名を改めるが第一だと、非常に感じたやうに話した事があります。かういふ、棚から牡丹餅の落ちたやうな話に釣り込まれて、改名をするものが非常に澤山あるやうであります。又、中に心ある人は、戸籍上の改名が出来ないのに、改名したからとて、何の効果もあるものではあるまいといふのもあります。

姓名と運命との關係は、果してそんなものでありませうか。私は、これを解決する必要があると思ふのであります。

總て運命を論ずるには、唯、一時的の状態にのみ眼を着けて居らずに、原因に溯つて研究しなければなりません。獨り運命研究に於てのみならず、一切の事物は、原因の下に結果を生ずるものであります故に、先づその原因を尋ねて、結果の是非を斷すべきものなのであります。

例へば、生年月日時に運命は定まると説く四柱推命の如きも、其生れた日を原因として、之を研究するので、生れた日や刻が、その年や月に或は相生し、或は相剋してゐる、その原因に依つて、今年に善いとか悪いとかの、是非善惡の區別を見出す、即ち原因に依つて、結果の如何を判斷するのであります。

又、住宅の鑑定に於ても、相生の年に相剋の方位に移れば發達する、暗劍殺や五黃殺を犯せば、病氣したり失敗したりすると説くのは、其移轉の原因が悪い爲に悪い結果を生じ、善き爲に善き結果が生れると斷するのであります。

姓名と運命の關係に於けるも、亦斯くの如くであります。呱呱の聲を揚ぐるや、東郷

平八郎とか、乃木希典とか命名される。その命名の原因が、その人一代の運命に關係する所あるを説くのであります。一時的の原因に依り、恰も下駄の齒を替へるやうに、改名する事を説くものではないのであります。

何故に平八郎といふ名をつけたか。その原因の研究は、運命觀上、頗る價値ある問題であります。人間も、呱呱の聲を揚げた時には、全く無名であります。少くとも人間として、名無きものは、その存在を許されませぬ。命名に依て、始めて東郷平八郎なる一個の人間が、完全に出現した譯となるのであります。他人から見れば、不思議でも何でもありませんが、その當人に取つては、その名が、嘗に五十年百年の一生涯のみならず、死後何百年何千年に到るも、「我」を代表する唯一のものとなるのであります。姓名の大切な事は、之を以て見てもわかるであります。若しも人間が生れる時に我輩は東郷平八郎であるぞと名乗つて飛出するものであるれば、これは絶對のもので、別段研究の餘地は無い譯であります。生れて始めて平八郎と名付けられたのであつてみれば、即ち、平六でも平七でもいゝ譯であるのに、平八郎と名付けられたに就ては、其人が生れながらにして、平八郎たらざるを得なかつた或る運命が、其處に胚胎したものの

でありまして、姓名と運命の連鎖は、其處に生じたのであります。

六

「名は實の寶」とは、此處の事を言つたものであらうと思ふのであります。換言すれば、命名せられた刹那に、其人の運命は外に現はれたものというてよいので、命名といふ事實に、一の機能を生じて、之が善惡に働くものであります。例へば、東郷平八郎といふ名はその命名の刹那に於て、後年元帥大將として全世界に著聞せらるゝの運命を現して居つたもの、乃木希典といふ名は、その命名の刹那に、既に晩年殉死せざるを得なかつた運命を語つて居つたものと見るのであります。

故に、この點から申しますれば、命名には左の二つの機能を生ずることゝなります。即ち

- 一、其人の運命は、命名の刹那に現はれて居る
- 二、其人の運命は、命名の如何に依て活動する。

といふことであります。

第一の場合は、平八郎とか希典とかいふ命名は、其人の運命の表象であることを見るので第二の場合は、其運命は、命名に依て如何に活動するかを見、その活動に依つて、善惡

の起伏を見るのでありまして、この二つが、姓名と運命の關係を研究するの根本となるのであります。

原因に溯つて研究しなければならぬといふのは、即ちこの事でありまして、随つて私は、姓名の研究は生兒の命名に據るを第一義とするのであります。

即ち、無名の生兒に新に命名するといふ第一原因に根本を置くのであります。其命名が、運命表象から見て最善のものであるれば、その姓名は、終生その人の運命を助けて、幸福ならしむるものであります。更に、姓名の最善なると共に、その表象を活動せしめて、教育、修養等を以て之を助けたならば、即ちその最善なる姓名を外部から助けなければ、その將來の成功は、真に疑ふべからざるものであります。餘り子が生れるから、もう此邊で留めて貰ひたいといふので、お留と名付たといふやうな事は、よく無教育な人の間に聞 事でありますが、その愚や及ぶべからずとするも、兎も角もそのお留といふ名には、それだけの意義がある譯でありますから、況して、聊かでも子供の將來を思ふ人は、生兒の命名には餘程の考慮を費さなければなりません。是れ親たるもの、義務の第一歩であらうと思ふのであります。

七

然らば、改名といふことは、果して効果のあるものであるか。私は之を左の二項に分ちて述ぶるを便宜とするのであります。

一、總ての點に完全に改名の出来る場合。

二、改名するも戸籍上の法規が之を許さざる場合。

即ちこの二つの場合であります。

第一の場合には自分は固より、總ての知人も之を認め、且、戸籍上にも立派に改名の出來たのを指すので、斯くの如く完全にやりさへすれば、悪いと思はれた名を、善いと思ふ方に改めたのでありますから、敢て差問のある筈はないのみならず、其結果の必ずや良好なるべきは、疑ひを容れない處であらうと思ひます。恰も家相の悪しき爲に、悪しき運命の活動の起る場合、之を改めて善き家相となし、善き運命の活動に廻轉せしむるのと同様でありまして、運命は死物に非ず、活物なりといふ處から見ても、この改名は名實共に具はるものといふ事が出来るのであります。

第二の場合には、私はその改名の効果を疑ふ者であります。現今の姓名論者は、徒らに改名々々と、改名さへすれば速座に幸運が向つてくるやうに言つて、戸籍上の事は、

殆ど意を用ひて居ないやうであります。

然らば、戸籍と運命とに、どんな關係があるのかと尋ねる人があるかも知れませぬが若しも改名を戸籍が認めなかつたならば、其人には舊名と新名と、名が二つある事となります。封建時代の武士でない限り、又、雅號に非ざる限り、人に二つ以上の名はあるべき筈がないので、若しあれば、その孰れか一つを除けば、あとは嘘の名であります。名は前にも述べました通り、自分を代表するものであります。この代表する名に、本名と空名とがあり、本名の方には運命との交渉が絶わ、空名の方に交渉が出来るといふことは、如何にしても服する事の出来ない理窟であります。

世の中に、名と實の相伴はないものがあれば、それは價値の無いものであります。姓名に於けるも亦斯くの如く、實の伴はない空名に、好運命が交感するといふ理由は、斷じてあるべき筈がないのであります。自分勝手に名を改めて、往復の文書に認めたりして居た處で、戸籍に存して居る本名といふものは、消れるものでもなければ、無くなるものでもありません。これは、姓名を責任ある場合に使用する時に、立所に明瞭となるのであります。



例へば金銭貸借の証文とか、諸官衙に對する一切の書類とか、苟くも多小の責任と義務の伴ふ場合には、本名に非ざれば使用することは出来ませぬ。即ち、戸籍の通りでなければなりません。

斯くの如く、責任ある場合には本名を使用し、無責任の場合にのみ改めたる名を使用しながら、責任ある場合には、運命の交感なく、無責任の場合にのみ之を認めるといふ事は、殆ど、愚も極まつた話ではありますまいか。

更に一面から言へば、斯くの如き場合には、自分には二つの名があるといふ觀念が、どうしても除かれぬ筈であります。此心理作用は、運命上、頗る面白くない結果を持ち來らねばなりません。

二念は總て疑ひであります。疑ひに非ざれば妄念であります。一切の事物に、二念あり、妄念あつて成功するものはありませぬ。二兎を追ふ者は一兎をも得ずで、二念ある處には、その一念をも成就する事が出来ないのみならず、二念の安心が常に錯綜して、運命の活動にも、亦二途を生ずるの道理であります。斯くの如き場合に満足なる結果を得るべからざる事は、最早言ふを俟たない處であらうと思ひます。

即ち、戸籍の認めないやうな改名は、常に無益なるのみならず、大害があるを信じて私は之に賛同する事は出来ないであります。

然しながら、戸籍面の改名には、なか／＼面倒な條件がありまして、運命上の表象が悪いからといふ理由では、之を許されない事になつて居りますが、然も、自分の姓名は悪い、悪いから改名はしたいが、戸籍を改める事が出来ないから、止むを得ず、悪い儘で我慢しなければならぬといふ場合があります。斯くの如き場合には、どうすれば宜しいか、私は實印を改めることを勧めたいのであります。

實印は、誰しも知る如く、無責任の場合に使用するものではありません。片々たる一枚の書類と雖も、實印の押捺に依つて、實に非常なる價値を生ずるもので、首と釣替といふ如く、人の生命より二番目に大切にされるものであります。然も、之を改める事は到つて容易なものでありまして、何時でも、思ふやうに改印する事が出来ます。私が、改名の出来ない場合には改印せよといふのは、この理由に依るのであります。

尚、實印と運命の關係は、頗る重大なるものであります。之は別に講述することゝ致します。

### 第三章 天海僧正の命名考

#### (一) 原本の由来

これより本論に入つて、説かんとする命名法は、彼の徳川家康の帷幕に參して、天下の諸侯を陰から操縦したといはるゝ、淨土宗の怪僧、天海僧正の秘法といふものであります。

今、天下に廣く行はれて居る命名法は、大部分は、この天海僧正のものを布衍したのでありまして、説く人に依つて、多少相異の點はあるにしても、大體の骨子とする所は皆同じ事であります。さうして、非常に解し易く出来て居りますから、大抵の人は、直ちに應用する事が出来、随つて猫も杓子も命名法を始め、終に今日の如く、一種の流行のやうになつたのであります。

私の茲に用ゐるべき原本は、大正元年の秋、神戸のミカドホテルの主人後藤氏から得たものでありまして、後藤氏は、彼の有名な天下の浪人、小美田信義氏から得られたのであります。小美田氏が、尾張の桶狭間なる天海僧正の寺に寄食して居られた時、不

開の厨子があつたのを不圖開けてみたら、一巻の巻物が出て来た。之が即ち天海僧正の命名秘法であつたのであります。小美田氏も、仔細に之を研究してみた結果、姓名の恐るべきものなるを悟つて、其後東京に於て、盛に姓名鑑定をやつて居られるさうであります。

#### (二) 六個條の意義

この命名法に、六個條の憲法があるといふ事は、第一章に述べて置きました。その六個條とは、左の如きものであります。

#### 第一條 意義

本法中最も重き條件にして、姓名は、其意義透徹するを要す。若し意義透徹せざれば假令他の條件具備するとも、不幸を免れず。又、他の條件具備せざるも、意義徹底せば萬難を排して成功す。

#### 第二條 天地の配合

天を姓とし、地を名とす。天地の配合、順を失し不良なる時は、百事調和を欠き、苦辛多く、加ふるに、病災厄難に遭遇して信用を失し、不運不幸なるに到る。就中衝突

に到りては、分立、離反、孤獨となり、病災厄難は不順より一層甚し。事物實行困難多し。幸ひにして成功するものあれば、健康を保ち難し。

### 第三條 乾坤の組合

其乾坤の組合せの良否は、身体の健康と不健康と、運命の幸と不幸とを來すものにして、乾坤調和すれば、身体健康にして又發達するも、否なる時は、病弱にして不幸なり。

### 第四條 五氣の組合

五氣とは、木火土金水の五行なり。五行の活動する否なることは、以て其人の賢愚利鈍の分るゝ所にして、又、事業に活動する否なることに歸着する運命觀察なり。

### 第五條 名の運數

名あれば必ず字劃あり。字劃の運數は、中年迄の運命を現すものにして、時に晩年に關係する事ありと雖も、大抵は中年迄とす。

### 第六條 姓名の運數

名と姓とは、車の兩輪の如し。名あれば必ず姓あり。姓あれば必ず名あり。この姓名の字劃は、運命に交渉する所最も重大なり。中年より晩年の運命を現すものにして、名と姓との字劃に依りて、其運命を觀察するなり。以上の六個條が、姓名運命觀の根本をなすもので、更にそれより、八十一個條の善惡の項目が出るのであります。

この六個條を、實例にして示すと、左の如きものであります。

## 大隈重信（實例の一）

先づ第一條の、意義から觀察すると、

大は、易にも、「大なる哉乾元」とありまして、小に比較する事の出來ない無邊の意義であります。又、大は長なりともあり、又、偏なりともあります。隈は、淮南子に、曲隈深潭とありまして、水の深潭に、曲に入るの姿であります。又、隈は隠れてあらはれざるを云ふともあります。この二字の意義を綜合すると、大隈とは、永く世に隠れて現はれざるの表象であります。

重は、柱用の切、音は種であります。種は、あつまる、わさする、かさなる、等の意義があります。又、重は厚なりとあつて人に厚く、重は貴なりとあつて國に貴重せられ重は尊なりとあつて、人に尊ばれ、又、重は難なりとあつて災難もあります。信は、易の繫辭に、「人の助くる所の者は信なり」とあつて、如何にも交際の廣さを意味し、又、「大蒙の人信なり」とあります。又、左傳の僖七年に、「命を守り時と共にするを信と謂ふ」とあります。

是等の點を綜合して、大限重信の四字に意義を求めると、第一には、「永く世に隠れたる人にして、國に貴重せられ、人に尊ばれて大蒙の人、即ち偉大の人物なり」といふ事が出来ます。又、第二には、「永く世に隠るゝ人なれども、國に貴重せられ、人に尊敬せられ、人の助くる時が来て大命を守つて時と共に活動する大偉人なり」ともいふ事が出来るのであります。

次に第二條の、天地の配合から觀察すると、姓を天とし、姓の上の一字を天と定めるので、天の大は三劃であります。又、名を地とし、名の上の一字を地と定めるので、地の重は、九劃であります。天は必ず地より勝

れて居なければならぬ。即ち字劃數が、地より多くなければならぬ。然るに大限重信は天が劣つて、地が勝れて居ります。即ち、天地の配合は逆であります。

天地の逆は、人に嫌はれ、常に不平にし、人の意氣に觸れ、不治の病氣に罹るか不具となり、信用を失し、自暴自棄に流るゝ等の結果を生ずるのであります。

次に第三條の、乾坤の組合から觀察すると、大限重信の四字は、大は陽性で乾、限は陰性で坤、重は陽性で乾、信も陽性で乾であります。即ち、乾坤乾乾となり、三陽一陰を疊むの有様で、此配合は、陽が勝つて頗る善いのであります。

乾坤の配合善き結果は、富貴にして幸福を享有し、長壽を保つといふ表象となるのであります。

次に第四條の、五氣の配合から觀察すると、大は火、限は木、重は火、信は金であります。即ち、火木火金となるので、この五氣配合は、頗る活動を意味して居ります。詳しく言へば、姓の火木は、木は火に依つて活動し、火も木に依つて活動する。然しながら、之は持続性のない表象で、一時的の活動

が多い。名の火金も、金は火に依つて活動するけれども、其本質を變じて、熔解せらるゝものでありますから、是亦一時的で、持續の力が薄いのでありあります。(序ながら、この命名考の五行は、九星や干支の五行の相生相尅とは、全く解釋が異つて居ります。例へば、火水は、五行では水尅火となつて敵と敵との對比となるに拘らず、この命名考では、第一活動の配合よき良配合となり得ます。誤解のないやうに一寸附言して置きます)

次 第五條の、名の運數から觀察すると、  
 重は九劃で、信も亦九劃、合せて十八劃となり得ます。これは非常な吉數で、其解釋に「十八劃は、幸運にして權威數を含む。大志大望を貫徹して名利共に行はれ、富貴と權威とを併せ有して天命に終る」とあります。

次に第六條の、姓名の運數から觀察すると、  
 姓の大は三劃で、限は十二劃であります。合せて十五劃、之に名の十八劃を合せると三十三劃となり得ます。

三十三劃は、「權威數にして、智謀に富み、剛毅果斷にして、恰も旭日昇天の勢を以て、大功を奏すべき幸運なり」とあり、「教育なき者は、剛性にして内外の平和を破

り、浮浪の群に投ずる事あり」とあり、又「劍難に遭遇す」とあります。

以上の解釋に依つて、大隈伯の運命を見ると、頗る當れる處の多いのに驚かざるを得ませぬ。殊に晩年に於ける一大光明は、姓名考上の結論といつても宜しいのであります。

### 犬養 毅 (實例の二)

先づ第一條の、意義から觀察すると、

姓の犬は、如何とも解釋のしやうのない字であります。穆天子傳に、「守犬七十」とか、「士に豚犬の奠あり」とかありますが、矢張犬の意味であります。養は、音は痒で、育なり、畜なり、長なりとあります。孟子の「我善く浩然の氣を養ふ」は、頗る、犬養君の人格に適つた語で、笱子の、「養畧にして動する罕なり」は、一寸皮肉であります。

要するに、この犬養の姓二字は、到底意味徹底せるものとはいふことが出来ませぬ。豚犬を養ふといふ上からいふと、犬養君には、天下の名士を下に置いて宰相たるの運命

は、先づありますまい。即ち己れ以上の人物を操縦して豚犬の如く、度量海の如くなる事を得ないのは、犬養の二字が之を語つて居るやうであります。君が改進黨以來、堅く持し來つた節操と人格と言論とから見れば、苟しくも同じ系統の人物は、皆君の膝下に集まらなければならぬのに、露の國民黨の分裂と言ひ、動もすれば、親しかるべき政友の君を離れんとするのは、不思議といはねばなりません。犬養君は姓に祟られて居るものごではありますまいか。

名の毅の字は、説文に、妄怒なりとあり。左傳宣二年殺敵爲果、致果爲毅、謂爲致、果敢、毅敵之心是爲強毅。とあり、論語に「剛毅木訥仁に近し」とあり。之等を綜合してみると、毅といふ字は、優柔なることなく、意思剛し、決斷多し、おもひきりよし、こはし、つよし、などといふ意義で、或書には、「毅は家の怒りて毛を豎つる意なり」ともあります。

以上に依つて、犬養毅の三字を解釋すると、豚犬を養ふの人にして、果斷に富み、資性潔白にして、人格高き仁者なりといふ事が出来ます。且根本的に他と調和することの出来ない性格で、自分を信すること厚く、容易に人に下らない。下らないのみならず、

敵と見れば必ず戦はねば止まないといふ勢ひであります。

之が、犬養君の人物を語つて居るのは、頗る面白いことでもあります。一國の宰相たるには、餘りに正直過ぎて、部下を統御することが出来ないといふのは、甚だ遺憾であります。君は、從來、逆境にのみ在つて人格を磨いた人でありましたから、將來も、依然として、逆境に在つた方が、不幸の如くにして、實は君の幸福であるかも知れません。即ち姓名の意義の徹底しない方が、却つて善いのであるかも知れないのであります。

次に第二條の、天地の配合から觀察すると、

犬は四劃で、毅は十五劃であります。十は零數であるから之を捨てる。五劃となる。天が四劃で、地が五劃でありますから、其配合は頗る宜しいのであります。

次に第三條の、乾坤の組合から觀察すると、

犬は四劃で陰、養は十五劃で陽、毅も十五劃で陽であります。即ち、陰陽陽で、この組合せも大に宜しく、大隈伯と同様であります。

次に第四條の、五氣の配合から觀察すると、

犬は土、養も土、毅は木であります。土木は、九星や干支で言へば、木姓土で、甚だ悪い相性であります。茲では頗る自然と見るのであります。土は木を生じ、木は土を濕して、両者は相助け合ひ、即ち自然であります。故に犬養毅の五氣の配合は、頗る自然でありますから、温厚で、慈愛心が深く、又、一切の事をなすに、權謀術數を弄せず、自然に任せて無理をしませぬ。此邊にも、犬養君の人物が見えて居るやうであります。

次に第五條の、名の運數から觀察すると、

十五劃は、富貴幸福にして長上の助けを得、破竹の勢ひを以て立身出世して、名をなすべき幸運數であります。若し姓が犬養でなく、大養であつたならば、意義徹底して、頗るの好運命であつたらうと思ふのであります。

次に第六條の、姓名の運數から觀察すると、

犬養の十九劃と、毅の十五劃、之を合せると三十四劃となります。三十四劃は「凶變一度來る時は、凶は重ねて大凶を生じ、自らの幸福を失し、大困難、大辛苦ある凶運なり」とあります。

之で見ると、晩年は頗る凶運のやうであります。五氣の配合もよければ、陰陽の組合も頗る平穩でありますから、大した事は決してありません。然しながら、逆境を脱する事は容易の業ではありませぬ。假令脱することを得るも一時的でありまして、永遠に順境に棹して、平和の船に泰平の夢を見る事は、到底出來ない運命であります。

以上二つの實例を見たならば、姓名と運命との關係が、どんな工合になつてゐるかといふ事は、恐らく了解が出來るだらうと思ひます。即ち姓名に依つて運命を知らんことするには、第一に意義を見る。第二に姓と名の頭字を見て、姓の頭字の字劃が、名の頭字の字劃よりも多ければ、天地の和合で少ければ逆で、同數なれば衝突とするのであります。第三に乾坤を見て、奇數が陽性で乾、偶數が陰性で坤、この配合の善惡を見る。第四に五氣、第五に名の運數、第六に姓名の合運數を見ること、實例に示した如くであります。

### 第四章 字割數の定義

次に、姓と名との字割に依りて、運命の善惡を觀察する條項を一括して述べます。  
 字割を調べるには、「康熙字典」とか「玉篇」とか、最も正確なる字典に據らなければなりません。我々が日々書いて居る文字で、字割を間違はせて居るものが甚だ尠くないのであります。例へば、「之」といふ字は四劃でありますが、我々は大抵三劃に書いて居ります。斯くの如く、單に自分の慣用に依つて字割を輕卒に定めた日には、飛んでもない間違ひが起つて、僅に一劃の多少の爲に、其意義に雲泥の相違を生ずる事があります。何と言つても、字割は姓名運命觀の基礎となるべきものでありますから、よく注意せねばなりません。

左の説明文の、最初にある數字は字割數を示したものであります。

▲一 ▼ 大吉數であります。始める、收める、集める、等の意があり、天長地久とも稱すべく、萬寶蠅集の基とあり、無事平安の裡に幸福を保つべき貴重なる數であります。

ります。

▲二 ▼ 甚だ凶運であります。重ぬる、離散する、等の意で、進退の自由意の如くならず、平安和合を缺き、辛苦困難多き運命であります。

▲三 ▼ 幸運數であります。集める、交る、等の意で、天賦の幸福を享受し、名利共に行はれ、立身出世すべき吉數であります。但し、六個條の要件具備せざる場合には、斬るか、斬らるゝか、災害を免るゝ事は出来ませぬ。

▲四 ▼ 凶惡數であります。合する、従ふ、等の意、獨立進取の氣乏しく、諸事實行上、苦心支障多く、精神の發達を缺く不運の凶數であります。殊に六個條の要件惡しき時は、亡身、亡家、發狂、變死、頓死、難治の惡病、顔面醜を殘す病等起り、放蕩無頼の徒となり、大困難に終る。幸ひに意義良好にして、教養具はる者で、稀に大成功をなし、貞婦孝子を出す事がありますが、病身か短命で、比較的世に現はれず然も晩年に到り家政亂れ、故障百出、失敗に終るを免れませぬ。

▲五 ▼ 幸運數であります。集める、進む、等の意があり、和合數で、草木の種子の春陽に逢ふて芽を吹く如く、次第に幸福を増し、富貴繁榮を來すべき吉數であります。



ます。

▲六▼ 幸運數であります。納める、續く、の意、天賦の徳高く、名利並び行はれ、萬寶家門に集るの吉祥數であります。但し六個條の要件悪しき時は劔難數となる  
ことがあります。

▲七▼ 權威數と言ひます。萬事に調和を缺くの嫌ひあり、多少の困難不和等があつても、介意なく萬難を排して進むべく、事物を整理し、天賦の精力を發揮し、成功すべき吉數であります。但し、五氣に於て木火を持つ時は、荒淫か、強情か、白痴であります。教育あり修養ある者は、大に頭角を現はすに到りますが、無教育の者は博徒の群に投する事があります。婦人にして木火を持つ時は、荒淫にして小策に巧みであります。且劔難の恐れがあります。

▲八▼ 幸運數であります。開くの意、志操堅固にして進取の氣強く、名實相副ひ、衆望を博し、意外の幸福を享け、百事困難なく、成功すべき吉數であります。但し、六個條の要件悪しき時は劔難數となります。

▲九▼ 凶運數であります。散ず、離れる、等の意でありまして、利益去り、効

空しく、名譽を失し、身退くといふのが萬事の終りを告ぐる究極であります。殊に、六個條の要件悪しき時は、亡身、亡家、發狂、變死、頓死、醜面難治の病に罹るか、輕きも放蕩無類の徒となり、幸ひにして意義良好、教養具はる者、稀に大成功家、貞婦、孝子等を出す事がありますが、不幸短命病身で世に現はれず、晩年は種々の故障失敗を來し、大困難に終るを免れ得ませぬ。又、自殺、刑罰、不具、劔難數で、之を名に持つ人は、両親の困難裡に生れた者が多く、二十五歳迄に両親と別居を要するの  
であります。

▲十▼ 合す、重なる等の意、萬事空虚の如く、家運の末世に生れたる如き、非常の困難辛苦ある凶數で、殊に六個條の要件悪しき場合は、全然九と同様、亦自殺、刑罰、劔難數であります。

▲十一▼ 陰陽交感和合の數でありまして、天賦の幸福を享け、次第に富貴繁榮を招き、假令失敗することあるも、幸福は重なり來りて、最後を全うするものであります。

▲十二▼ 凶運で、孤獨數非凡數とも言ひます、百事發達の意なく、困難多く晩年

には意外の災害を蒙るものであります。何故非凡數といふかといふと、常人の爲し得ざる、即ち善惡とも其極端に走るものであるからであります。且子供に縁薄く、父母兄弟姉妹にも早く別れ、若し意義悪しき時は、九のそれと同様の結果を來すのであります。

▲十三 ▼ 智識才略に富み、萬難來るも介意せず、巧みに切抜け得る吉數であります。故に、自然富貴榮達を來し、家運を振興せしめ、中興の家祖ともなるべき幸運數であります。

▲十四 ▼ 凶數であります。事物不足勝にして、才力金力共に乏しく、諸事勢して効なく世に現はれず、所謂縁の下力持といふに終る運命であります。且孤獨數であります。何事にも孤立となり、骨肉財産にも離れ易く、又非凡數とも言つて、善惡共に極端に走る、即ち大人物となるか大凶徒となるか、到底常人の爲す能はざる事を爲すものであります。然も意義悪しき時は九のそれと同様の結果を來します。賤業婦に本數の多いのを見ても、凶數なる事がわかります。

▲十五 ▼ 幸福數であります。上長の恵みを享け、破竹の如き勢ひにて立身出世

し、富貴繁榮を極むべき吉祥數であります。

▲十六 ▼ 統領數と言つて、何事にも人の頭に立ち、よく衆望を集め、名利共に行はれ、大事大業を成就すべき幸運數であります。尙勝利をも意味して居ります。若し六個條の要件悪しき時は、劍難數となるものであります。

▲十七 ▼ 權威數と言ひます。無理の行ひが多くて、内外に不和なる事はあります。が、意志強固にして、何事も志望を貫徹せんば止まず、百折不撓、即ち氣を以て大業を遂行し得る幸運數であります。然し本數が、木火と共にある時は、特に婦人は荒淫となり、小策を弄するに巧みであります。又強情でありますから、無教育のものは、多く俠客的人物となるものであります。

▲十八 ▼ 幸運にして權威數を含んで居ります。思立つた事は必ず貫徹せしめ、名利亦行はれ、富貴繁榮を極むべき吉數であります。

▲十九 ▼ 凶數であります。百般樞要の位置に在りて、種々の事業を劃策する事あるも、内外の平和を缺き、困難を招き、漸次悲境に沈淪すべきものであります。殊に性淫奔にして、木火ある場合には荒淫となり、若し六個條の要件悪しき時は、九のそ

れと同様の結果を来します。又劍難數となり、負惜みの數ともなり、片親と別居を要するものであります。

▲二十▼ 凶惡數であります。生涯困難辛苦を免れず、百事不調和にして、種々の厄難に遭遇するものであります。且強情片意地で、負惜みが強く、殊に婦人に甚しい。女主人にして、家號若しくは名、合姓名に本數を持つ者は、稀に大成功を遂げ、長壽を保つものであります。夫には早く死別し、若し實子があつても生死別して、他人に跡を繼がしむるものが多いのであります。又若し六個條の要件惡しき時は、九のそれと同様の結果を来すものであります。

▲二十一▼ 幸運數であります。又統領數とも言ひ、事物の勝利を意味し、假令失敗する事あるも、幸福は直ちに來つて、家を興し名を擧ぐるに到るの吉祥數であります。

▲二十二▼ 凶惡數であります。萬事不如意で、前途に大凶事を控へ、企業の勇氣も失せ、困難に陥るものであります。又孤獨數及び非凡數でありまして、骨肉財産に離れ易く、相談相手も少く、孤立的に世を終り、若し六個條の要件惡しき時は、九の

その如き結果となるのであります。

▲二十三▼ 幸運數であります。又統領數とも言ひ、大志大望をよく貫徹して、富貴幸福を來すべき吉數であります。

▲二十四▼ 幸運數であります。多少の困難辛苦はあるも、智謀才畧ある爲に、俗にいふ濡手に粟ともいふべき仕合あり、志望を遂行し、家を興し名を擧ぐるに到る吉數であります。

▲二十五▼ 利害併行の運數でありますけれども、鋭敏にしてよく大功を奏すべき幸運數であります。然し性質強情なれば、他人との平和を缺く者が多く、無教育の者は、多く遊人といふ群に投じます。又婦人は荒淫で、小策を弄する事が巧みなるものであります。

▲二十六▼ 大困難大辛苦ありて、到底一生涯を安穩に送る事の出来ない凶惡數であります。假令壯年時に幸福なるも、晩年は非常の困難に陥り、又何等の原因なくして俄に發狂する事がありますから、發狂數とも言ひ、刑罰、淫奔、負惜みの數で、婦人にあつては、多情にして魔道に陥る事があります。若し六個條の要件惡しき時は、

九のそれと同様の結果を來すものであります。

▲二十七▼

中等の吉數であつて、中年までは利害共に行はれ、先づ幸福の身となるも、中年後は百事意の如く進まず、失敗損失を招き、困難に陥るものであります。又色情數なれば、木火を持つ者は荒淫となり、且怠け者が多く、權威數にて智謀はあれども、權威を弄して不和を招き、若し六個條の要件悪しき時は、信用を失し、色情の爲めに失敗して無氣力となり、進んで事業を経営する能はざるに到るものであります。

▲二十八▼

大凶數にして刑罰數といひます。遭難の意味を有し、終生辛苦絶えず、刑罰に觸るゝ事ある凶運數であります。時として英雄、神童、怪力者など稀有の人物を出す事がありますが、若し善意良好ならざる時は、病身か短命か、兎に角世に知られず、不運の裡に終る者が多いのであります。又六個條の要件悪しき時は、九のそれと同様の結果を來します。又劍難數であります。

▲二十九▼

幸運數であります。智謀に富み、大志大望を貫徹し、名譽を博すべき貴重數であります。但し虚言多く、猜疑心深く、若し意識悪しき時は、殊に婦人は荒

淫となり、小策を弄するに巧みとなるものであります。

▲三十▼

自動的幸運數であります。吉凶善惡併行し、恰も幸福と艱難を拘ひ交せられた如く、大成功家たるか、大失敗家たるか、總ての運命は自動的であります。若し本數が、改姓名に於て得たる數なる時は、八十一數中の最大幸運數の一であります。斯る場合には、他の條件の不備は何等の災害をも及ぼさず、必ず一度は偉業を成就すべきものであります。

▲三十一▼

幸運數であります。大山を壞ち、不毛の地を開拓するが如く、不撓不屈の精神を以て大業を成就し、富貴隆昌を極むべき吉數であります。

▲三十二▼

幸運數であります。時機到らば意外の幸福を享け、成功すべきもので、其勢ひ破竹の如きものであります。上長者の庇護援助を受け得ざる時は、衰運たるを免れないものであります。然も尙幸運を失はないものであります。

▲三十三▼

權威數であつて、智謀に富み、剛毅果斷、恰も旭日昇天の如き勢ひを以て大功を奏すべき幸運數であります。然し強情の爲に内外の平和を破り、教養乏しき者は浮浪者の群に投する事があります。婦人にあつては荒淫で、小策を弄するに巧

みで、又劍難數であります。

▲三十四▼ 凶運數であります。身分の如何を問はず、一度凶事が来ると、凶は凶を生んで終生挽回すべからざる大困難に陥るべき凶數であります。又刑罰及び發狂の數で、若し六個條の要件悪しき時は、九のそれと同様の結果を來すのであります。

▲三十五▼ 文學技藝の發達すべき數であります。智謀はあるも、大事大業を成さんとするには、衆を統率するの權威に乏しく、結局は困難に終るべき運命であります。又平凡數とも言ひます。可もなく不可もなく、一時盛なる時機はあつても、終には平凡となるものであります。

▲三十六▼ 凶惡數であります。幸ひに中年迄に幸福を享有することあるも、晩年には必ず名狀すべからざる悲境に陥るものであります。且本數が木火と共に名、合姓名中に現はると時は、男女に拘らず荒淫となり、若し六個條の要件悪しき時は、九のそれと同様の結果を來します。時として稀有の人物を出す事ありとも、意義不良なる時は短命か病身か、世に現はれずして辛苦の裡に世を終るものであります。

▲三十七▼ 事物に忠實、よく衆望を荷ひ、徳を修め、名譽を博し、富家門に蟬集す

べき最大の幸運數であります。

▲三十八▼ 文學技藝の發達すべき數にして、又平凡數、總て三十五と同様の運命であります。

▲三十九▼ 權威財産長命の三徳を具備し、智謀衆に秀で、富貴幸福を永く子孫にまで傳へ得べき幸運數であります。

▲四十▼ 智略抜群、精神堅實、膽力あり、事物意の如く行はれ、成功すべき幸運數であります。傲岸不遜なる時は、晩年に到り批難攻撃集中し、拭ふべからざる恥辱を蒙り、既得の幸福をも失ひ、遂に世に容れられざるに到るものであります。若し六個條の要件悪しき時は、強情にして内外の平和を缺き、教養なきものは博徒の群に投じます。又一生の中に一二回は、必ず一命にも關はる災害がありますが、巧みに切抜け得られる運數であります。

▲四十一▼ 性剛毅にして智謀に富み、大事業を成就し、名利共に具はるべき幸運數であります。

▲四十二▼ 博達にして發明心に富み、多藝の質なれども、萬藝は一能に如かずで、

却つて辛苦困難あり。俗にいふ器用貧乏といふ運數であります。然し若し改姓名に依りて得たる數なる時は、八十一數中の最大幸福數の一となり、何事か必ず偉業を成就すべきものであります。又若し本數を有する者が富者なる時は、其富は必ず正當の手段で得たものではありませぬ。又婦人には、殆ど美人の無いものであります。

▲四十三▼ 智謀ある才子なれども、徒らに威權を弄し、意思堅實ならざるが爲、却つて信用を失ひ、財を散する事が多いけれども、天與の幸福は、依然として具はるものであります。例へば犯罪の爲獄に投せられ、一時信用を失ふ事があつても、出獄後は直に之を回復するの類であります。又元來淡泊にして利慾の念淺きか、然らずんば強慾非道にして、發狂者となることあります。且、意義惡しき時は刑罰に觸るゝことあり、六個條の要件惡しき時は、婦人にあつては白痴若しくは病的荒淫となり、終りを全くせぬものであります。

▲四十四▼ 凶惡數であります。終身貧困の苦しみあるもので、大家の滅亡を相續するか、大家を滅亡せしむるか、乃至は身を亡すものであります。若し六個條の要件惡しき時は、九のその如き結果を來し、稀有の大人物を出した場合も、二十八のその

の如き結果となります。又本數は發狂數で、且木火を持つ時は荒淫となるものであります。

▲四十五▼ 幸運數であります。よく志望を貫徹し、多少の困難又は凶事あるも、萬難を排して成功すべきものであります。一生の中に一二回は、一命にも關はる大困難に遭遇しますが、巧みに切抜ける事を得ます。

▲四十六▼ 凶運數であります。事物意に任せず、精力を失ひ、辛苦困難あり、短命若しくは刑罰に觸るゝことあります。若し六個條の要件惡しき時は、九のその如く、稀有の大人物出づる場合は、二十八のその如き結果を來すもので、又發狂數でありますから、俄に發狂することあります。

▲四十七▼ 幸運數であります。天與の幸福を享け、他人とよく和合し、大業を成就し、富を重ね、長く幸福を保つべき吉祥數であります。

▲四十八▼ 幸運數であります。智徳を兼備し、天賦の幸福を享有するもので、人の師となり、或は顧問等となつて、尊敬を拂はるべきものであります。

▲四十九▼ 吉凶相半するの數で、吉事は吉事を生んで大幸福を得べきも、晩年は

之と正反對に、凶事は凶事を生んで災害交々到り、大困難に陥るべき運數であります。

▲五十▼ 凶運數であります。一度は志望を遂げる事がありますけれども、晩年は極度の困難に陥り、破産を見るべき運命であります。若し又六個條の要件悪しき時は九のそのの如き結果を來すのであります。

▲五十一▼ 一生の中に一度は、名利共に得られ、富貴の身となるべきも、晩年は非常の困難に陥り、甚しきに到つては、非業の死を遂ぐるの恐れある運數であります。

▲五十二▼ 幸福數であります。百折不撓の精神を以て志望を遂げ、又投機心も盛で且先見の明あり、功名を得べき吉祥數であります。

▲五十三▼ 凶惡數であります。運の最後に生れたるもの、如く、萬事不如意にして事業を劃策するも支障起りて失敗を重ね、晩年に到るに従ひ貧苦困難に陥るべき運數であります。

▲五十四▼ 凶惡數で百事意の如く進まず、不利、損失、災害交々起り、如何なる豪家も衰頽を免る能はざるものであります。若し六個條の要件悪しき時は、九のそのの

如く、稀有の人物を出す場合には、二十八のそのの如き結果となり、又發狂數で、且一生に一二度は盜難、火難、水難、劍難に遭遇するも、要件良好なる時は、災害從つて輕きものであります。

▲五十五▼ 吉祥數であります。時に凶禍に罹ることあり、又意志堅固ならざるにも拘らず、事物意の如く行はれ、隆昌を極むべき幸運數であります。

▲五十六▼ 凶惡數であります。事物齟齬し、世に後れ、事業を營まんとするの精力乏失し、困難を來すものであります。若し前半期に苦勞した者は、後半期に幸福を得ますが、之に反し、前半期に幸福の位置にあつた者は、後半期には名狀すべからざる大困難に陥るのであります。且、六個條の要件悪しき時は、九のそのの如く、稀有の人物出でたる場合は、二十八のそのの如き結果を來し、又發狂數で、且一生に一度大災禍に遭遇すべき事も、五十四のそのの如くであります。

▲五十七▼ 幸運數であります。生涯の中に、一度は生死計り難き迄の大困難を嘗むる事がありますが、よく之を免がれ、然も事物意の如く進み、富貴幸福となるべき吉祥數であります。

▲五十八▼ 幸運數であります。一生に二三度は破産亡家の厄に逢ふ事があります。が、再興して幸福を招き、安樂を保つべき吉數であります。

▲五十九▼ 凶惡數であります。忍耐力と勇氣に乏しくして百事好結果を得ず、損失災害、破産、亡家等來るか、非業の死を遂ぐるこあるの厄運數であります。若し六個條の要件悪しき時は、九のその如き結果を來し、一生に一度は大災厄に遭遇すること五十四のその如くであります。

▲六十▼ 凶運數であります。事業を営むに、一定の方針なくして着手するの質でありますから、成功の望みなく、意外の損失を招き、困難に終るものであります。若し六個條の要件悪しき時は、九のその如き結果を來すのであります。

▲六十一▼ 傲岸の質で、内外と不和を招き、事物の平安を保持し難きも、財運強くして隆盛を極むべき幸運數であります。

▲六十二▼ 凶惡數であります。一時幸福なる時代あるべきも、内外和せず、信用乏しく、遂に志望達せずして、家運次第に傾くべきものであります。又一生に一度、必ず盗、水、火、劍難に遭遇すべきこと五十四と同様であります。

▲六十三▼ 百事發達するを意味し、事毎に困難なく成就し、富貴繁榮を永く子孫にまでも傳ふべき幸運數であります。

▲六十四▼ 浮沈多く、事物悉く顛倒し、衰微せし家を相續するか、亡家を再興するか、それ等の困難なか／＼の事にして、其他六個條の要件悪しき時、以下總て五十四と同様の凶惡數であります。

▲六十五▼ 事物よく調和して意の如く行はれ、富貴幸福を極むべき吉祥數であります。

▲六十六▼ 内外の不和を招き、非常なる困難あり、事物悉く離散するの凶運數であります。又發狂數にして、且刑罰に觸るゝの虞あり。時として稀有の人物を出したる場合は、二十八のその如く、一生中に必ず一度、盗、水、火、劍難に遭遇すべきこと、五十四のその如くであります。

▲六十七▼ 幸福數であります。如何なる障害にも打克ち、自立獨行、諸事意の如く進み、大名譽を得、殊に上長者の援助を受くる場合には、疾風迅雷的の成功を遂ぐるものであります。



▲六十八▼ 智謀才略に富み、發明工夫に長じ、よく衆望を得、富貴幸福を享受し、立身出世成功すべき幸運數であります。

▲六十九▼ 病氣、災害、不幸の事續出し、短命か、若しくは遭難の意味を有する凶運數であります。且六個條の要件悪しき時は、九のそのの如き結果となり、一生に一度必ず盜、火、水、劍難を蒙るべきこと、五十四のそのの如くであります。

▲七十▼ 短命、盲啞、癩疾、貧苦、實に名狀すべからざる凶運數であります。若し六個條の要件悪しき時は、九のそのの如き結果を來すのであります。

▲七十一▼ 活動力稍鈍き嫌ひあるも、自然に享有せる幸福に依り、立身出世すべき幸運數であります。

▲七十二▼ 薄幸數であります。利害苦樂相半し、晩年に進むに従ひ、益々悲境に陥り、遂に家を亡ぼすに到るものであります。

▲七十三▼ 幸運數であります。進取の氣象に乏しく、何等の志望なきにも拘らず、天與の幸福により事毎に成就し、一生を平安愉快に送るべきものであります。

▲七十四▼ 凶惡數であります。無智無能にして終生座食、遂に無一物となり、社會

に捨てられ、悲惨なる末路を見るのであります。六個條の要件悪しき時は、九のそのの如き結果を來し、一生中必ず一度は盜、火、水、劍難に遭遇すべきこと、五十四のそのの如くであります。

▲七十五▼ 自然の幸福を享け、事物難なく成就し、名利共に得られ、富貴幸福なるべきも、自ら進んで事業を經營するに到らば、却つて損失災害を招くものでありますから、大に心すべき數であります。

▲七十六▼ 凶惡數であります。如何なる大家に生るゝも、家運漸次に衰微を來し、破産、亡家の悲運に沈み、且短命であります。又一一生中に必ず一度盜、火、水、劍難に遭遇すべきこと五十四のそのの如くであります。

▲七十七▼ 吉凶相半するの數で、中年まで幸福の生活をしたものは、其後に到つて大困難に逢ひ、之に反し、中年迄を辛苦に送つた者は、晩年には至大の幸福を享受するものであります。

▲七十八▼ 凶惡數であります。中年迄は相當幸福なる生活をして來た者も、中年以後は漸次衰運に傾き、晩年に到つては愈々辛苦艱難の限りを盡して終りを告ぐるもの

であります。

▲七十九▼ 無定見無節操にして精力乏しく、事物を遂行せんとすれば障害百出し、遂に無爲に終るべき凶悪數であります。又一一生中一度は必ず盗、火、水、飢饉に遭遇すべきこと、五十四のその如くであります。

▲八十▼ 當初幸福なる者も、何時しか悲境に推移し、又終生困難辛苦に責めらるゝの凶悪數であります。然れども、此意を悟り、晩年に入るに先立つて隠退せば、其災害を免がれ得べきものであります。

▲八十一▼ 自然の富貴幸福を享け、萬事意の如く行はれ、隆昌を極むべき幸運數であります。

以上を以て、數の定義は盡きたのであります。如何に長い姓名の人でも、如何に難しい字の人でも、八十一劃以上の數を持つた人は滅多にあるものではありませんが、若しも八十一劃を超ゆる數のある時には、其數より八十一を引去り、残つた數を以て本位とするのであります。例へば九十八劃のものは、 $98 - 81 = 17$ となる、即ち十七を以て定義の數とするので、九十八劃は前記の一七の條項を見れば宜しいのであります。

## 第五章 姓名の意義

### (一) 譯れる意義の解釋

命名考<sup>めいめいこう</sup>上<sup>じやう</sup>、最も大切なるものは姓名<sup>せいめい</sup>の有する意義<sup>いぎ</sup>であります。先に述べた憲法六箇條<sup>けんぽうろくかんごう</sup>中にも、意義<sup>いぎ</sup>が其首位<sup>そのしゆゐ</sup>に居りまして、姓名<sup>せいめい</sup>は、其意義<sup>いぎ</sup>透徹<sup>とうてつ</sup>するを要<sup>ひつ</sup>す。若し意義<sup>いぎ</sup>透徹<sup>とうてつ</sup>せざれば、假令<sup>たしな</sup>他の條件<sup>ていけん</sup>具備<sup>じゆび</sup>するとも不幸<sup>ふかう</sup>を免がれず云々<sup>うんぐん</sup>とありまして、即ち、意義<sup>いぎ</sup>の良否<sup>りやうひ</sup>は、命名考<sup>めいめいこう</sup>上の骨髄<sup>こつずい</sup>と言つても宜しいのであります。

ところが、この意義<sup>いぎ</sup>といふものは、從來<sup>じやうらい</sup>頗る簡單<sup>かんたん</sup>に見られて居るやうでありまして、本講<sup>ほんかう</sup>の命名法<sup>めいめいほう</sup>を發見<sup>はつけん</sup>された小美田氏<sup>こみでんし</sup>すらも同氏<sup>どうし</sup>の弟子<sup>でし</sup>から聞く處<sup>ところ</sup>に據りますと、餘り重視<sup>じゆし</sup>して居られぬやうであります。

私は之<sup>これ</sup>に疑ひなきを得ないのであります。姓名<sup>せいめい</sup>の意義<sup>いぎ</sup>は、そんなに輕視<sup>けいし</sup>して差支<sup>さしつか</sup>へないものであらうか。少くとも天海僧正<sup>てんかいそうじやう</sup>の説<sup>せつ</sup>かれたる意義<sup>いぎ</sup>といふものは、今少しく慎重<sup>じゆんじゆう</sup>に取扱<sup>とりあつか</sup>はなければならぬものと信するのであります。

現今<sup>げんこん</sup>澤山<sup>たくさん</sup>世<sup>よ</sup>に出て居る姓名考<sup>せいめいこう</sup>上の書物<sup>しょぶつ</sup>の内<sup>うち</sup>から、二三<sup>にさん</sup>その意義<sup>いぎ</sup>に關する意見<sup>いけん</sup>を抜出してみませう。

山川景國といふ人の「姓名は怪物である」といふ書物には、

「姓名は、全体の意義を通せしめ、文章たらしむるを要す。徳川家康とは徳、川の如く流れ、家は永久に康らかなるの義、大倉喜八郎とは、大なる倉の鍵を有し、喜びて開く人といふ義、喜び開くとは、利益の爲に開くの意なり。大山巖とは、巍々たる大山の上の大岩石の義、故に姓名は、

宏大なるか、

美麗なるか、

嚴正なるか、

豪壯なるか、

優長なるか、

深淵なるか、

以上其性質を有し、意義明確、語縷簡明、呼稱し易からしむるを良とす。云々」

とあります。又、加田格堂といふ人の「撰名秘法」といふ書物には、

「姓名の意義は、文字通り成るべく平易に解し、故らに持つて廻るが如く解するは不

可なり。左に其良否の實例を示す。

東郷平八郎

此姓名は讀んで字の如く、東の國を平げ開く男との意にして、即ち東洋の平和を期すこの意味にも解せられ、意義頗る善良なり。八は開くと解すべし。

大山巖

此姓名は、大山巍峨として、動かさること巖の如しとの意にして、高大と永久とを意味し、實に完全無缺の意義なりとす。

細木登

此姓名は、文字の如く小木に登るとの意にして、危険を意味し頗る凶惡なり。此姓名の者は、旅行中他郷に於て頓死せり。云々」

とあります。又、此書の記す處に據ると、古川市兵衛は、古川とは古い川であるから水の無い川である。此處に市場を開き、兵營を設くるの意であるから頗る善良である。又板垣退助とは、板垣を退して、外部より政府を助くるの意であるなど、説く者もあり、甚しきに至つては、岩崎彌太郎とは、岩の崎に立つて大海を望み、彌々大望を立

つる男であるなど、解して居る者もあるのであります。

是等は、兎にも角にも書物となつて世に出て居る説でありますから、責任を持つたものと見て宜しいのでありますが、無責任な者になると、源太郎といふ名は泥棒である。何となれば、源はミナモトで、源は皆暗い。その暗い處で働く太一郎であるから、泥棒でなければ何か悪事を働く者だと、かういふ無茶苦茶なものもあります。

意義の二字を解すること、斯くの如く簡單であるのみならず、姓名を謎か考へ物のやうに心得て、勝手な熱を吹いて居るのは、實に嗤ふに堪わたるものであります。

抑も小美田氏が、この姓名考を世に發表されてからといふものは、到る處、恰も雨後の筍の如く哲名家か生じまして、哲名館とか姓名學會とか看板を出して居るのはまだしも、一寸嚙つたばかりの猫や杓子までが、いゝ加減な團子理窟を並べて居るに到つては、眞に沙汰の限りであります。

斯くの如き現象を呈するに到つた原因は、要するに、姓名の意義を前述 如く單純に解する處に在るのであります。其害毒は、一に意義の解釋の妥當ならざる所から來て居ると言つて宜しいのであります。

天海僧正其人の高徳と、僧正の出た徳川初期の時代といふことを頭に置いて、この命名法を觀察しますと、現今の意義の解釋は全く盲目滅法といふものであります。東郷平八郎は、東の國を平らげ開く男だなど、實に其場の御都合論、人氣取り論、淺薄な牽強論に外ならないのであります。

(二) 姓名の眞の意義

天海僧正が、姓名の意義の大切なることを、憲法の首座に置いて示したのは、誠に故あることであります。一体日本で使つて居る文字は、皆支那から輸入したものであります。故に、一切の文字の源は支那に在るのであります。

支那は、文字を以て一切の義理を明す國でありまして、文字には、容易ならぬ意義もあれば、典據もあり、決して輕々に解釋するを許さないのであります。殊に姓名考に於ては、文字が生命でありますから、一點一劃たりとも謬れば、意義に重大なる差異を生ずることもあつて、就中嚴密に調べなければならぬのであります。

既に文字を以て生命として居る以上は、姓名の意義なるものは、必ず文字夫自体に備つて居なければならぬ事は明かであります。

即ち意義とは、姓名の文字の具備する意味といふ義でありまして、大山巖を、大山巖巖として、動かざること巖の如しなどいふのは、文字の意義を説いたものでなくして、文字を藉りて大山巖其人を形容したものに外ならないのであります。換言すれば、大山巖といふ人物を、大山巖なる姓名の文字に當嵌めたものでありまして、大山巖といふ姓名の意義は、そんなに單純なるものではない筈であります。

姓名の眞の意義とは如何なるものでありませうか。私は之を實例に依つて述べたいと思ふのであります。

### 田中元照（實例の一）

田中とは田の中で、稻を植むるか、米が稔るか、耕作するとかいふことを直に聯想させる文字であります。之が田中の意義であるかと言へば然らず、單に文字の表面であります。眞の意義を知るには、必ずその典拠を探らなければなりません。

田は、康熙字典に據ると、「亭年の切、音圃」とあります。説文には、「陳なり、穀を樹うるを田といふ、四口十阡陌の制を象るなり」とあります。玉篇には、「土なり地なり」とあり、正韻には、「土巴に耕すを田といふ」とあります。

中は、「陟隆の切、音忠なり」とあり、周禮には、「五禮を以て民の僞を防ぐ、之を中と教ゆ」とあります。又、正なりとあり、穿つとあり、内なりとあり、成なりとあり、半なりともあり、應なりともあり、莊子には要なりともあります。

斯くの如く、田中の二字を一々の文字に就て解釋すれば、穀を植うる爲に土地を穿つといふ意もあれば、土地を正しく成するといふ意もあり、尙種々なる意もあるであります。せうが、それは田中を一字宛に分解したものでありまして、姓と言ひ名といふ以上、單に田中といふ二つの文字としてではなく、田中といふ一の姓として其意義を考へなければなりません。

例へば、水と塩とがあります。水は水なり塩は塩なりで、水は水の味がします。塩は塩の味がします。兩者各々獨立して居りますが、この水と塩とを一つの容器に盛りますと、茲に塩水といふものが出来まして、水の味も變じ、塩の味も變じ、つまり塩水といふ一の味が出ます。

田は水であります。中は塩であります。田には田の意義があり、中には中の意義があります。若しこの二つを一器に投するならば、茲に田中といふ塩水、即ち姓が出来ます。

水のみではない蓋のみではない、田のみではない、中のみではない、田中といふ一の別の味、即ち意義が生じます。之が眞の姓の意義であるのであります。別言すれば、田といふ父と中といふ母とから、田中といふ姓の意義が生れるのであります。之を知るには、康熙字典や玉篇に就て、反切を見るのであります。即ち二文字より、其の意義を歸納して來るのであります。

田中の二字より生れるものは、仲であります。仲は憂うるで、憂心仲々などいひ、頗る面白くない意義となるのであります。又、忠ともなります。又、倒反すると佃となり、佃はタツクル(田作)で、之は農業者向らしくありますが、勿論姓のみでありますから、遽に斷することは出来ませぬ。

次は元照であります。元は「愚衰の切、音原」とあります。易の乾卦には、「元は善の長なり」とあり、其他、始なり、大なり、首なり、氣なりなど、あります。

照は「之笑の切、音詔」であります。易の離卦には、「大人以て明を繼ぎ、四方を照す」とあり、書泰誓には、「日月の照臨の如し」とあります。

是等に依り、一々の文字に就て解釋すれば、根原に着眼して四方を照すでも言へま

せうが、元照といふ名の眞の意義は、即ち元照の二字より生れるものは、叫であります。泣き叫ぶの叫といふ字であります。

以上を綜合してみると、田中元照とは、憂ひ叫ぶといふ意義を持つて居るのであります。私の前半生の運命は、眞に其通りであつたのであります。即ち私の運命は、其儘姓命に現はれて居るのであります。

この元照といふ名は、私が十三歳にして出家した時に、師匠から命せられたものであります。三十五歳の時に還俗するや、田中菊治郎となつたのであります。即ち元照の名は消滅した譯でありますけれども、禪僧生活の記念にもと思つて、今尚居士號として用ゐて居るのであります。意義が甚だ不良なので、早晚改めなければならぬと思ふのであります。

### 田中光顯 (實例の二)

田中光顯伯の人格に就ては、世既に定評があります。嘗に其家庭が紊れたるのみならず、長く宮内大臣として威を揮ひ、其間に巨萬の財産を造つた人でありまして、其の財産の出所に就ては、種々の説もあつたのであります。本派本願寺の疑獄事件暴露と共に

に、立所に其邊の消息も明瞭となり、遂に世間に顔向の出来ない人となつたのであります。

田中の姓は前に述べたのと同じこと、光顯の名も、字を見て居ると如何にも立派で、其宮内大臣時代には、成程光り顯れて居たかも知れませぬが、反切すると、光顯は倦であります。倒反すると荒であります。即ち田中光顯は、忠に倦み荒むの意義を有して居るのであります。

之を田中伯の人物に見る、真に不思議な程適中して居ります。悪政とか暴政とかいふも、私利私慾を伴つて居なければ、或場合許すべき點もありませんが、身宮内大臣の榮職に居り、皇室の御勝手元を司るの地位に在るを奇貨として、身代を太らせるに到つては、實に言語道斷であります。吾人は、果してさういふ人が日本人であるかどうかを疑ふ者であります。

斯くの如く、姓名の意義には、文字夫自体にもあり、文字の結合に依つて生れるものもあるのですが、天海僧正の命名法には、私が以上に述べたやうなことは、別段際立て、書いてはないのであります。それは、言はず語らずの理に、自ら説かれてある

ものと、私は信するのであります。

何となれば、其當時の社會と今日の社會とは、殆ど總ての點に於て、物事に非常なる運庭があるからであります。

昔封建時代には、名といふものは左程重く視られなかつたのであります。武士が既に其通りでありますから、百姓町人に到つては、殆ど今の、犬猫の名にも等しい待遇を受けて居たもので、何村の何兵衛、何町の何吉と言ふのは、横町のクロとか、隣のタマとかいふ位の價値よりなかつたのであります。

然るに、名乗となりますと、之は又頗る嚴格を極めたもので、毫末も苟くせず、非常に意を用ひて命じたものであります。

即ち、荒木又右衛門の又右衛門は名で、名乗は吉村であります。後藤又兵衛の名乗は基次、大石内蔵之助の名乗は良雄であるの類でありまして、然も、名乗は必ず二字と定つてあります。名の方には、何左衛門とか何之助とか字數は定つてはありませぬが、名乗には、決して一字や三字以上はなく、二字に定つたものであります。

今日でも、稀に名の外に名乗など持つて居る人もありますけれど、別段戸籍が認めた

ものでもありません。唯古風に持つて居るに過ぎないものでありますが、維新前後までは、まだ生命がありまして、西郷隆盛なども、名は吉之助であり、今の山縣元帥の名の有朋も、前は名乗であつて、名は狂介であつたのであります。

随つて、名乗の一字を、子孫に傳へるといふ事も行はれまして、皆が皆ながらといふ譯でもありませんが、大体に於て徳川家が家の字を傳へ、毛利家が元の字を傳へ、前田家が利の字を傳へるといふ風になつて居ります。畏くも有栖川宮家なども、此歴代の御名には、必ず戈のある字を御用ひ遊ばされたやうに拜見するのであります。

故に、天海僧正の命名考の如きも、今日の如く一般に濫用せらるべき性質のものに非ずして、武將の名乗を命する爲に出来たものであると、私は信じて疑はないのであります。

昔の武將が、何故に名乗を大切にされたかと言ひますれば、總て絶對的責任のある所にこの名乗を用いたからであります。姓よりも名よりも、何よりもこの名乗に重きを置いたからであります。

さうして一面には、この名乗から華押が生れます。華押は、俗にいふ書判でありまし

て、實印よりも重んじたものであります。この風は、今の武人にもあると見なしまして、東郷大將の書には、必ず華押があり、乃木大將も、其遺書には華押を用ひて居られます。華押は、必ず名乗から定めるので、名や姓は決して與らないのであります。

名乗を大切にすることが故に、其命名にも非常な意を用ひ、意義の透徹を求め、不祥を避け、寸毫も遺憾なきを期したのであります。随つて天海僧正の命名考あるのも、誠に故なきに非ずであります。

斯くの如く昔の武將が、名には至つて無造作らしいものを命けて居るにも拘らず、名乗には四角張つた頗る嚴格なものを命けて居た精神から考へても、さういふ時代に、その指南となるべく生れた命名考の主意から推しても、姓名の意義なるものを單純に解釋し、東郷平八郎は東の國を平げ開く男だの、細木登は細い木に登るのだから他郷で頓死するのと言つて居ることが、如何に無意氣で馬鹿氣で居るかといふことが解るのであります。

今日に於ては、名の外に別に名乗といふものはありません。其代りに、名が、昔の名乗と同様に重んぜられて居ります。してみれば、今の人が、昔の武將が名乗を重んじた



と同様の精神で名に臨むのは、聊かも不都合はありませぬ。寧ろヨリ以上に其精神を尙ばければならないと思ふのであります。

(三) 婦人の姓名と命名考

今日の所謂哲名家の多くは、婦人の名にも善悪を論じて居りますが、天海僧正の命名法には、特に婦人に對するものとはありませぬ。何となれば、其時代に於ては、婦人の社會的地位は殊に低いものでありまして、殆ど水平線上に頭を出すことは出来なかつたのであります。況して武士の全時盛代ではあり社會の階級が嚴重に區分されて居つた時代とて、婦人の命名などいふものは、頭で問題にならなかつたものと見て宜しいのであります。

今日では、婦人の地位はグン／＼向上して、これで經濟的獨立さへ出来れば、大威張で男子と肩を並べて進み得る所まで来て居ります。随つて名の如きも、漢字を使用することが大流行で、裏店の車夫先生の娘でも、なか／＼堅くるしい名を持つて居ります。然しながら我國では、古來婦人の名には平假名を用ゐるのが習慣でありまして、又それが非常に優しい、女らしい感じを起させるのであります。現今段々女らしくなくなる

結果か、漢字の七難しい名が大分増えましたけれども、まだ／＼大多數は平假名又は片假名であります。一寸有名な婦人で、世間では漢字の名で知られて居る人でも、戸籍では假名になつて居ることが非常に多いのであります。

問題は即ち、この假名が多いといふ處にあるのであります。

命名考では文字が生命であります。一字々々に意義を持つた漢字が基礎となつて居ります。故に一點一劃をもやかましく言ふのであります。假名は、固より漢字から生じたものではありますけれども、一字々々では何の意義もありません。殊に平假名に到つては、劃といふものが無いのであります。然も婦人の名には、片假名よりも平假名の方が遙に多いから厄介であります。

片假名なれば、劃はあるにはありますけれども、單に字劃といふ上から論ずる事になると、殆ど總てが二劃と三劃で、四劃は唯一つよりありませぬ。即ち大抵は同劃でありますから、彼是と區別を立て、論ずる餘地がないのであります。

天海僧正が、若しも婦人の命名といふことを考へて居たならば、假名を度外視する筈はないのであります。之が説いてないことを思ふと、全然婦人と命名といふことを顧

みなかつたものと言つて宜しいのであります。否、漢字を生命として居る以上、假名は之を度外視せざるを得なかつたのであります。

中には、假名は漢字から來たものであるから、之を漢字に直して、字劃を求むればよいといふ者があります。

之は、全く漢字の何物たるかを知らない説であります。何故なれば、例へば、つねといふ名があつて、之を漢字に直す場合、常とするか恒とするか庸とするか、孰れも同じくつねでありますけれども、字劃も意義も全く異なるのでありますから、果してどの字を撰んで直すべきか、その標準を見出すことが出来ないであります。

又、はるといふ名でも其通り、はるといふ漢字は、必ずしも春のみに限りませぬ。治もあれば明もあり、令もあります。是亦何を以て其内の一を撰ぶかといふことが問題であります。

殊に、本來假名で命名されたものを、漢字に引直すといふことが間違つて居るのであります。總て戸籍の認められた名を以て終始するのが正當であらうと思ふのであります。元來我國では、養子を迎へねばならぬ境遇にあらざる限り、婦人は必ず他家に嫁すべ

きを以て本分として居ります。従つて、道徳上、生家よりも嫁したる家を大切にし、即ち親の膝許に居るのは、假に居るのであつて、嫁して始めて我家を得るといふ形であります。

運命上から考へても、親の慈愛に包まれて居る内は、大抵は浮世の風波にも當らず、頗る平々凡々であります。一朝他家に嫁すれば、忽ち境遇は一變して、一家の主婦となり、二大親柱の一ともなるので、女としての生命は、寧ろ嫁して後にあるのであります。

然しながら、我國の家族制度では、家長といふものが嚴存して居りまして、それが婦人自身でない限り、婦人が自分の姓名を署して、絶對責任の位置に立つといふことがありませぬ。若しさういふ事があれば、夫に早く別れたとか、良縁がなくて獨身で暮すとか、家庭に風波が起つて財産でも分轄したか、孰れにしても餘り芳しいことではないのであります。

之に依つて見れば、生家に居る内にもせよ、嫁してからにもせよ、婦人の姓なるものには、左したる權威があるものとも思はれませぬ。然も命名考の本義として、意義は、

姓と名を通じてのものを採るのでありまして、假令意義は分離し得るとするも、合姓名の字劃數を得る爲には、どうしても姓を顧みない譯には行かないのであります。

故に婦人の命名には、無論成長の後嫁する先までは分りませぬから、生家の姓を本としなければならぬのでありますが、之は運命上、果して婦人の幸福であるかどうかいふことを、私は疑はざるを得ないのであります。

換言すれば、婦人が、その生れた家に發達するといふことの幸不幸が問題なのであります。私の相家上の經驗に徴するに、娘の縁が遠いとか、早く夫に死別れて後家になるとか、主人が絶えず病床に臥して居るとか、妻の權利が強くて、夫を自由にして居るとかいふ家は、あまりに婦人が其家に發達し過ぎるからであります。

是等は、實に家庭の大不幸であります。従つて、婦人の命名に生家の姓を本とすることは、一寸考へ物であらねばなりません。

斯くの如く述べて來ますと、婦人の命名といふものは、この天海僧正の命名法の範圍内であるか、範圍外であるか、頗る疑はしきものとなつて來ます。若し範圍内であるならば、意義の透徹を求むることが出來ませぬ。姓名の合劃數を認めることが出來ませぬ。

若し範圍外であるならば、この命名法は、全然婦人に應用すべからざるものとなるのであります。

私は、後者と見るを以て適當なりと信する者であります。何となれば、婦人に應用し得べき要素を、一も具備して居ないからであります。

のみならず、表面から見たところでは、現在の吾人男子にも、之を應用することの出來ないもの、如く思はるのであります。即ちこの天海僧正の命名考は、昔の武將の名稱を撰ぶ爲に出來たものでありまして、名乗は必ず二字に限られて居ります。然るに、吾人の名は二字に限られては居りませぬ。つまり、昔の人は名を輕んじて名乗を重んじ現代では名乗を顧みずして名を主とするところから、斯くの如き結果となつたので、之は當然のことであります。

然らば、天海僧正の命名法は、全く現代に應用することは出來ないものであるか。但しは出來るものであるか。茲には、唯この命名法に謂ふ所の意義とは、如何なるものであるかといふことを明かにするに止めたのであります。

### 第五章 五氣の配合

#### (一) 五氣とは何ぞ

五氣とは、木火土金水の五行を言ふのでありますが、この五氣の配合は、文字と文字との組合せのみで、其人とは何等の關係もないのであります。

他の命名法では、多く其人の五行と其名の文字の五行とを配合して運命を論ずることになつてゐますが、天海僧正のではさういふことはありませぬ。

文字の五氣とは、何に依つて知ることが出来るかといひますと、其發音に依るのであります。

發音には左の七音があります。

- (一)唇音 (二)舌音 (三)牙音 (四)齒音 (五)喉音 (六)半舌音 (七)半齒音

この七音を五氣に配當しますと、即ち

唇音が水、舌音と半舌音が火、牙音が木、齒音と半齒音が金、喉音が土となりま

以上を依つて、之を五十音に配當すると、左の如くなるのであります。

アイウエオ……………(喉音)……………土性

カキクケコ……………(牙音)……………木性

ガギグゲゴ……………(喉音)……………土性

サシスセソ……………(齒音)……………金性

タチツテト……………(舌音)……………火性

ナニヌネノ……………(舌音)……………火性

ハヒフヘホ……………(唇音)……………水性

バビブベボ……………(唇音)……………水性

マミムメモ……………(唇音)……………水性

ヤイエエヨ……………(喉音)……………土性

ラリルレロ……………(舌音)……………火性

ワヰウエヲ……………(喉音)……………土性

右の内でカキクケコの一行のみは、喉音と牙音とに亘り、従つて土性と木性の両性を

備へてゐることゝなります。

文字を右の表に當嵌めさへすれば、一切の五氣を知ることが出来るので、一字として洩れる文字はないのであります。例へば

兄、右、申、民、令、

では、「兄」はカ行ですから木性と土性、「右」はア行ですから土性、「申」はサ行ですから金性、「民」はマ行ですから水性、「令」はラ行ですから火性と知るの類で全然音に依るのみであります。

尙實例を姓名に求めると、

大	大	大	大	大	大	大	大	大	大
土	土	土	土	土	土	土	土	土	土
火	火	火	火	火	火	火	火	火	火
金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
木	木	木	木	木	木	木	木	木	木
水	水	水	水	水	水	水	水	水	水

等の如きものであります。

(二) 五氣の性質

五氣の活動は、九星や他の五行の活動とは正反對でありまして、循環の生氣を採らずして、逆轉の活動であります。

九星から言へば、水と木とは水生木で好配合であります。命名上の五氣の配合では水と木とは自然にして何等の活動なく、唯有りの儘に在りといふ平凡なものとなるのであります。

また九星では、水と火とは水尅火で大凶惡の配合であります。命名上では、水は火に依つて活動し火も亦水に依つて大活動するが故に、或は勇氣あり、或は才氣あるの表象と見るのであります。

即ち、九星は自然の循環に依つて活用し、五氣は自然の逆轉に依つて活動するところに両者の相違があるのであります。原本には左の如く説いて居ります。

「五氣の配合は、幹枝九星等と全然趣きを異にす。何となれば、彼の忌避する相尅なるものは本法の歡迎するところにして、相尅は其衝突に依りて活動を喚起する唯一の法則なり。其理由は、九星の相生比和は、本法に於ては濃厚に失し、進取の氣象を失ふものなればなり。故に本法に於て、火火の姓に金金の名を組むか、水水の姓に火火の名を組むか、木木の姓に金金の名を組むが如きは、最も善良なるものなり。

又、火金の姓に金火の名、又は火と金を配合せば、是最良にして、二種異性となり

頭腦明晰にして整理の術に富み、難事を難事とせず、機敏に事物を處理し、志望を貫徹すべきものなり。

若し之に反し、水火の姓に木金の名を組むが如きは甚だ不良にして、方針、見識の不定の者と化するなり。然れども變則としては最も注意を要するは、意義良好にして中年晩年數ともに達數なる上に、天地乾坤宜しきを得たるもの、木火、土金の全部が姓名に通じて散在するものは、大成功を遂げ、身体健全、長壽を保つべきことを記憶すべし。

之が本法の原則であります。以下、五氣の性質の説明に移ります。  
木の性質 本法に、「木は不平不足を意味す」とありまして、内心につまらぬ事ばかり考へて活動することを得ず、常に不平が胸にありて、恰も神経質の如く心が頓と晴れないといふのが木の本領であります。

従つて、木の配合は生涯苦勞の絶わぬもので、又意外に物事が溢滞します。即ち決斷力が鈍いからであります。然しながら、木木木又は木木木と重なる時は、溢滞の極を通り越して頗る活潑となり、恰も樹木繁茂すれば大風に雷同するが如く、思はぬ活動をなすことあり、凶は一變して大活動の人となるのであります。

火の性質 本法に於て「火は活動の意、聊か無理を含む。恰も海底の物を拾ふ象」とありまして、火は活動を以て本質とするも、活動も過ぎては亂暴となり、活動せざる時は全く其用をなさぬ。其平均調和を得ることが難しいから、従つて無理が出来るのであります。  
火の組合せは慘酷を意味します。如何なる難事に遭ふも難事とせず、外面亦頗る剛氣であります。火火火と重なるだけ其勢ひを増し、後顧せざるが火の本質であります。

土の性質 本法に於て、「土は温厚にして誠實に富むも、悲觀の意味あり」とありまして、土ほど温和なもの、土ほど度量のあるものはありますまい。故に土は、其性温厚にして度量はあれども活潑の氣に乏しく、氣概にも乏しく、稍馬鹿正直に類する所もありませんが、又大英雄、大豪傑の氣味もあります。  
従つて土土の配合は、頗る沈鬱にして進取の氣に乏しく、小心にして悲觀し易く、然

も一面人を人とも思はざることもあり、執れにしても不活潑といふのが土の本質であります。

七〇

金の性質 本法に於て「金は活動と争闘との意あり」とありまして、金は元土中にありと雖も一旦地上に出づる時は頗る活潑なる活動をします。相寄れば必ず音を發し、

金の伴ふ處 必ず争闘の伴ふものであります。

金の配合は、外面温厚なれども、内心に奮闘的氣象あり、金金金と重なる時は、却つて殺伐となつて、此配合の姓名には發狂する者が多いのであります。

水の性質 本法に於て「水は活動少し。火に通じて始めて大活動をなす。猜疑心に富む」とありまして水は其性頗る淡泊にして、自静力には富むも自動力に乏しい故、活動の鈍いのは當然であります。然しながら、一朝他から力を加ふる時は、其活動も頗る偉大であります。風を加ふれば大海嘯ともなり、火を加ふれば大動力ともなります。水の性は即ち他の力に依つて大活動を起すのであります。

水水の配合は、餘りに活動の氣鈍く、沈着の間猜疑心を起し、且男女共に嫉妬心深きものであります。水水水と重なる時は神經衰弱に陥り、甚しきは情死したりする者が

多いのであります。

(三) 五氣の活動

姓木にして名火なる時は、頗る多情の性であります。交際も上手なれば他人にも親切でありますけれども、物事に持續心がなく、忍耐力に乏しいのが欠點であります。又、事理に明かで理性の働きが敏く、無理なことをしませぬが、内には猜疑心が深く、又短氣な所があります。火は木に依つて生ずるも、火は木を焼失するのが自然でありますから、活動心と持續心のないのは免れないところであります。然し婦人には宜しい。

姓木にして名土なる時は、性温厚にして慈愛の念に富み、婦人には誠に適當な配合であります。かういふ婦人は、必ず婦徳を全うし、家庭は平和で、子孫に縁が深いのであります。一体木と土とは、持ちつ持たれつ、中庸を得て居ります。男子としては活動の力が足りませぬが、祖先からの家を神妙に守り、其血統なり財産なりを相續する爲には確に適當な配合と言はねばなりません。

姓木にして名金なる時は、木の不活潑と金の活潑との組合せであります。餘り力強き配合ではありませぬ。この性は、俗に手堅いといふ方で、義侠心もあり、又頗る忠實

七一

であります。使用人には持つて来いの配合で、輕燥浮薄の氣のないのが、この性の最も稱すべき特質であります。

姓木にして名水なる時は、之も不活潑なること夥しい配合でありまして、木は水に依つて養はるゝもので、誠に自然であります。自然なるだけ活動の氣に乏しくはありますが、無理がありません。温厚で親切で、相當の才氣もあり、先之も手堅いといふ方であります。

姓火にして名金なる時は、九星では火尅金であります。本法では、火は金あつて活動し、金は火の爲に活動し、兩者相寄れば活動を起します。故に本性の人は、萬事に熱心にして勇氣に富み、剛氣であります。又慈心深く、一攫千金の、冒險的の事業をやらうといふ人は、得て此性であります。男子なれば、事業家としても軍人としても、又事務家としても至極宜しいが、婦人には餘り活潑過ぎて、虚榮家となり、お轉婆となり易いのであります。然し本性の活動は第二位のものでありますから、條件さへ具備されてゐたら、強ち婦人でも悪いばかりではありません。要するに本配合の人は、活潑にして活動好なる所に、成功もあれば又失敗もあるので大に注意を要するのであります。

姓火にして名土なる時は、火は活動性で土は沈着性でありますから、全く相似ざるもの、配合であります。即ち土は火に依つて其性を變じ、火は土に依つて其活動を失ひます。故に本性の人は、活潑一點張りもなく沈着一點張りもなく、中庸を得てゐる結果、つまり何方も附かずになつてしまふ嫌ひがあります。然し常識は發達してゐますから、先穩健とでもいふべき配合であります。

姓火にして名水なる時は、即ち本法にいふ第一位の活動であります。水と火は積極と消極の二大對抗でありまして、現代で言へば、機械の運轉するのは、此二大力の活動に依るのであります。即ち火は水に依つて活動し、水は火に依つて活動します。従つて本性の人は激しき活動を好み、軍隊が突貫でもするやうな心持であります。故に唯進むことを知つて退くことを知らぬ弊があるのみならず、甚だ粗暴に流れ易く、或は喧嘩口論をしたり、つまらぬ俠氣を出して火中へ飛込むやうな真似をする傾きがあります。何分中庸を得ないので一方に偏し易く、慘酷な事をするかと思へば、親切の限りを盡すこともあり、其場の勢ひで何方へでも走るといふ風でありますから、甚だ危険であります。本性の婦人は、大抵は男性的で温順の心を欠き、婦人第一の徳たる慈愛に乏しい憾



みがありますから、婦人には本配合を忌みます。殊に教育なき婦人にこの配合あれば、非業の死を遂ぐるごがあります。過ぎたるは尙及ばざるに似たる配合であります。

姓土にして名金な時は、木土の配合の如く温厚にして誠實であります。然し活動の氣に乏しいのは自然の數で、金が土中になれば頗る安全、土も亦金を保護すれば、自らを傷害せらるゝ事なく、即ち兩者共に安全であります。其代り百年経つても千年経つても世に出る時はありませぬ。平々凡々然も活動に乏しき結果、猜疑心深く、沈鬱となるを免れ得難いのであります。

(四) 配合の實例

先にも述べた如く、この五氣は幹枝の配合とは異り、一物と一物との單なる對抗でありますから、輕重がありません。即ち水と火の配合は一の水、一の火で、強い弱いといふ關係が生じないのでありますが、幹枝や九星では、一物の對抗に非ずして、相生相尅の循環對抗であります。故に、金生水といふ時は、金より水を生ずる、即ち生ずるものと生ぜられるものとの輕重が附くのであります。又、水尅火といふ時には、水より火を尅するのであるから、水は火よりも強くなる譯で、兩者の對抗に、比和、相生、生

氣、退氣等の區別が生じ、非常なる差別を生ずるのであります。けれども、本法に於ける五氣は、單なる一々の對抗でありますから、姓が木で名が水でも、名が木で姓が水でも、同一なる判断を下して宜しいのであります。

以上に述べた處を綜合して、例を示すこととします。之は姓名を通じてであります。

木木火	木火火	火火木	火木木	木木土	木土土	木木金
金金木	木木水	水水木	火火金	火金金	火火土	土土火
火火水	火水水	土土金	土金金			
土土木	土土金	土土水	土土火	金金木	金金火	
金金土	金金水	水水木	水水火	水水土	水水金	
木木金	水水土	火火水	土土木	土土木		

右の如き配合は、姓と名とが一氣毎に異れば、先に説明したと同様の活動をなすのであります。即ち姓が土で名が金でも、單に土金の活動を見れば宜しいのであります。要するに、姓と名が一氣宛異つての二個の對抗は、三字でも四字でも同一の活動となるので、姓の木木も、名の金金も、重なる所には何等の意味はありません。然しながら、

姓の木と名の木と重なる時は、二個の活動となりまますから、其結果も亦當然異なることとなるのでありますが、右の例は、姓と名とが異性の對抗となる場合のみのものであります。

此配合は、本法では最良のものであります。何となれば、火木土金といふが如き混亂なくして、二氣の鮮明なる活動であるからであります。固より組合せの如何に依りて、種々なる要件も伴ひますけれども、他の五氣の配合に比して、最も穩健なるものであります。

ところが、姓と名とが二氣宛の對抗となる時は、どういふ事になりますか。左の例は二字姓二字名の場合であります。

- 木火木火 木火火木 木土土木 木土土木 火金金火 火金火金
  - 火水水火 火水火水 土水水土 土水水土 土金金土 土金土金
  - 金木木金 金木金木 金水水金 金水水金 水火火水 水火水火
  - 水木木水 水木水木
- 右の組合せも、殆ど申分なきものであります。即ち姓の二つの活動と、名の二つの活

動とが集つて、一層の力を得るので、姓名中に五氣の混亂なく、之も亦鮮明なる配合であります。

次の例は、二字姓三字名の場合であります。

- 木火木火木 土火火土土 水金水金金 火土土土金 金水水金水

右の如きは、智識もあり、才畧もあり、頭腦も明晰で、人の尊敬を受け、善良なる生涯に入るを得るといふ良配合であります。

然るに

- 木木木木 火火火火 土土土土 金金金金

といふが如き配合では、中庸も得ず、活動もなく、正直で慈悲心は深いけれども、片意地で融通が利かず、沈鬱にして神經質、要するに偏頗たるを免れないのであります。然し先にも述べた如く、條件に依つては却つて大活動に入る事もあります。又一に之を遣難配合と言つて、得て厄難に遭ひ易いのであります。

又姓名中に二氣が混亂して、

- 木火土金 金土木火 火土金水 水木金火

といふが如き配合となる時は、思想も一定せず、事業も一定せず、恰も大海に漂流するが如き運命を語つてゐるのであります。極めて凶悪であります。

要するに五氣の配合は、姓と名と異性二個といふのが最も良いのであります。姓が木で、名が火火でも、矢張一氣と一氣の配合でありますから、無論差支へないのであります。姓名の三字中に三氣あり、四字中に四氣あるが如きは、全く三氣、四氣の混亂であります。五氣の配合上、最も凶悪としてあるのであります。

## 第七章 天地の配合

### (一) 天地とは何ぞや

天地と云ふは姓を天とし、名を地と定めて鑑別するの方であります。姓名を天地に喩へたものであります。此觀察は人間は小天地なり、然して小天地の人間を代表するものは姓名なり、故に姓を天とし、地を名と定めたのであります。

天は陽にして地は陰なり、天は上に屬し、地は下に屬するが故に、上なる姓に天を配し下なる名に地を配したのであります。

此天地の善悪吉凶の差別を見るには、劃數を標準とするのであります。劃數を標準とするとは劃數の多少に依りて判断を下すので、例すると

大久保彦左衛門と云ふときは、大久保の三字の姓と、彦左衛門の四字の名との劃數を取るのであります。然し夫れを畧して大久保の頭字の大と、彦左衛門の頭字の彦の劃數を取るのであります。然すると大は三劃で、彦は九劃であります。即ち天が少くて地が多いこととなる、此天地の劃數の多少に依りて、運命に吉凶禍福ありと説くのが、天

地配合の主眼となるのであります。

此天地の配合の割数の多少に依りて、運命に如何なる差が生ずるか云ふに、左の三點に歸著するのであります。

1 天地の配合よろしきときは其人の運命は幸福にして身體も亦健全であります

2 天地の配合よろしからざるときは運命は不幸にして又病難災厄があります

3 天地衝突するときは不和、孤獨、訴訟、破産等の出来ごとを生ずるのであります

天地配合よろしきは、姓の頭字と、名の頭字とを比較して姓即ち天の割数が多く地の割数の少ないのを適當の配合とするのであります、先きの大久保彦左衛門の例から云ふと、天の大字の三割と地の名の産の九割とは、天の割数が少くして地の割数多きが故に、之を天地の逆と申して此配合は甚だ悪いのであります、田中菊次郎と云ふと、田中の田の頭字は五割で、菊は十二割でありますから、之れも天地の逆となるのであります然し十数以上は十を以て拂ふことになるから十二は二割となります、田の五割と菊の二割とは、天が多く地が少いから、之は天地自然で、最もよい天地の配合であります。如何なる場合にも十割以上は取拂ふこととなり又十割は零数となるのであります。

天地自然の配合よき姓名の人は、自然が一切の萬物を養ふて成育するが如く、身體も常に健全にして事業も亦自然に發達して、幸福なる人生に處することが出来るのであります。

之に反して天地の配合を得ずして、姓の合數割又は姓の頭字が名の頭字より割数多きときは、姓名が不自然となりて、陰陽時を得ざれば寒暑時に順はずして、暴風や雷雨等のあるが如く、身體が常に病いが多いとか、不具になるとか、酒癖があるとか、女色に迷ふとか、時に成効して時に失敗するとか、危険のことに遭遇して、安心なる人生を送り得ざる結果となるのであります。

天地の衝突とは、姓の頭字も五割なれば、名の頭字も五割であり、又姓が二十割で、又名が二十割なるときは天地同數であります、即ち之が衝突であります、斯の如く天地の衝突する、姓名を帯て居る人の運命は、人と喧嘩したり、刑罰に觸れたり、訴訟したり、又病の爲めに苦しめられたり、両親と仲悪しく兄弟とは親すと云ふ如き結果を來すのであります。

以上が即ち天地の配合より來れる姓名の活動となるのであります、今例すると

大石正巳

之は大石が姓で名が正巳であります、大の頭字と正の頭字との配合を見ると、即ち天地が逆で不自然なる運命の人であります、又大石が八割で、正巳も八割でありますから天地衝突で之亦頗る不祥の表象で、運命に一定せず、種々なる變遷を來す人生に生活する人と言はねばなりません。

川村景明

之は川村が姓で景明が名であります、姓の頭字の川が三割で、名の頭字の景が十二割でありますから、十割を取り去ると二割となり、即ち天地の配合が頗るよろしい更に川村が十割で、景明が二十割でありますから、零と零との配合となります、之は衝突で頗る悪ひ配合であります。

以上の例で天地の配合は能く了解が出来たと思ひますが、先きの川村景明の例の如く姓の頭字と名の頭字とが配合がよく、姓名合數の場合に悪しき時は、いづれに重きを置くかと云ふことを一言して置きたいと思ひます。

私はすべての場合に姓の頭字と、名の頭字とを取るを以て第一と信じます。何故か

と言へば天と云ひ地と云ふときは天は天のみにあらずして春夏秋冬の氣候の用があり、地と云ふときは草木森羅の用がありますから、頭字を主腦として後の字を用と觀るが甚だ親しいからであります、然し是は私の考へでありますから、取捨は諸君の實際によりて自由の研究に任したいのであります。

## 第八章 乾坤の組合

(一) 乾坤とは何ぞや

乾坤とは姓名の文字の奇数と偶数との差別に依りて運命の是非を断ずるの方法でありまして、奇数を乾とし、偶数を坤として其組合に就て吉凶の活動を察するのであります。

五田乾○  
四中坤●  
十二菊坤●  
八治坤●  
十郎坤●

即ち斯の如く組合するのであります、田の一字が奇数の乾にして以下は偶数の坤となるのであります。

此の乾坤の組合に依りて如何なる運命の活動があるか、其活動が六種に説明せられて居ります。

(二) 幸運乾坤

左の乾坤の組合は最上の組合で、文字の如く其組合せの姓名の人は幸運にして、自然の富貴と健康とを両有して長壽を保ち人生に愉快なる生涯を爲す人であり、其例を

示すと

以下○を乾とし●を坤とす

一字姓と 一字名の場合は

○ ● ○

姓名三字の場合

● ○ ○ ● ● ○

姓名四字の場合

● ○ ● ● ○ ○ ● ●

姓名五字の場合

○ ● ○ ○ ● ○ ● ● ○ ○ ● ●

姓名六字の場合

○ ● ● ● ○ ○ ● ● ○ ○ ● ● ○ ○ ● ●

●○○●○○  
 ○●○○●○○  
 ●○○●○○  
 ○●○○●○○

●○○●○○  
 ○●○○●○○  
 ●○○●○○  
 ○●○○●○○

●○○●○○  
 ○●○○●○○  
 ●○○●○○  
 ○●○○●○○

●○○●○○  
 ○●○○●○○  
 ●○○●○○  
 ○●○○●○○

姓名八字の場合

●○○●○○  
 ○●○○●○○  
 ●○○●○○  
 ○●○○●○○

(三) 單一乾坤

左の乾坤の組合は頗る悪いのでありまして、如何に他に充分の條件が具備するも此組合なるときは短命か夫れで無くは大苦辛をするか又は大失敗をするか誠に凶悪であります加之他の條件が悪いと、廢疾、發狂、白痴、變死、刑罰等を受けて凶悪に一層の勢力を増すのであります。

○●○○●○○  
 ○●○○●○○  
 ○●○○●○○  
 ○●○○●○○

●●●●●  
 ●●●●●  
 ●●●●●  
 ●●●●●

すべて乾か坤かの重なる場合が一切單一乾坤となるのであります。

(四) 注意乾坤

左の組合は善悪交又と云ふ有様で、富貴になれば人に損害せられるか、身体が健全なれば妻子に離るゝとか、兎角身邊に注意を要する出来ごとが多く甚だ用心を要するのであります。

●○○●○○  
 ○●○○●○○  
 ●○○●○○  
 ○●○○●○○

然し此組合は誠に稀であります。

(五) 遭難乾坤

左の組合は誠に凶悪でありまして、火災、水難、盜難等に能く遭ふか、又は殺意等を起して人に難をかけるか、又非常に薄福に終るかであります。

●○○●○○  
 ○●○○●○○  
 ●○○●○○  
 ○●○○●○○

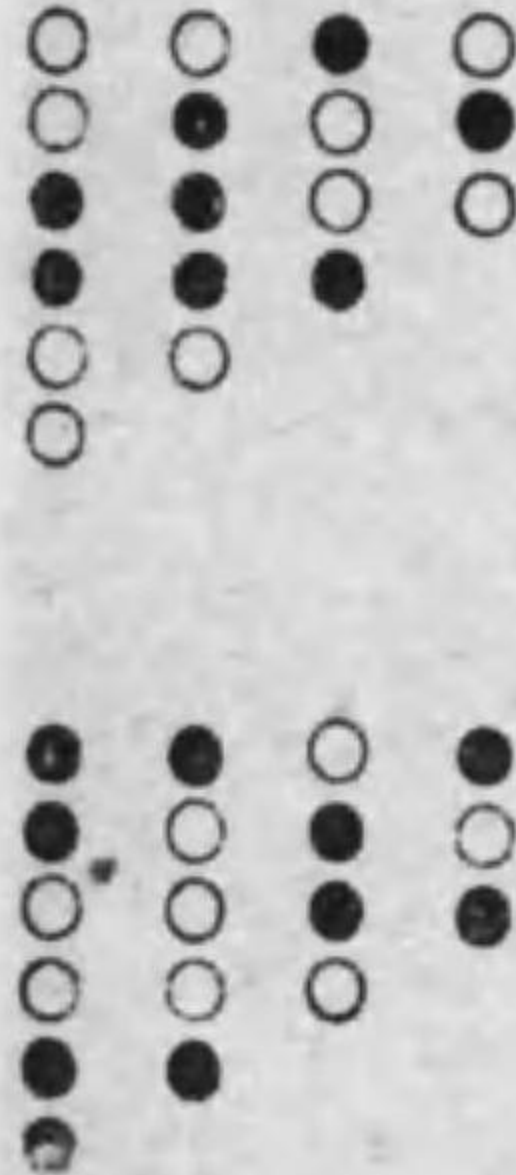
(六) 離乾坤

左の組合は身体が健全なれば困難が多いとか、妻子に離れ易く、短命にして又親の家を飛出す運命であります、此乾坤は養子に得ての組合すれば其凶悪も甚だ軽いのであります。



(七) 狭 乾 坤

左の組合も亦甚だ凶悪でありまして、多くは不具の病を起す人が多い、又人に難を受けるか訴訟事が絶へないか、すべて進歩することが出来ない組合で、終身苦辛に世を渡る人であります。



### 第九章 名と合姓名の運數

名の運數とは、名の劃數に依りて其人の運命に變遷あるを云ふのでありまして、其善惡は運數の八十一ヶ條に示す通りであります。

名は中年までの運命を表はすもので、時に依ると晩年と相前後することがあるかも知れないが、先づ名は中年までの運命を表すものと観るが適當であります。

姓名の合數即ち姓の劃數と名の劃數とを合せ數へた全體の數に依りて八十一條に照して其運命を察するのでありまして、田中菊治郎と言へば姓の九劃と名の三十劃と三十九劃になるのであります。

是れから運數の善惡を分けて觀みましょう。

#### (一) 最上幸運數

- 一 三 五 十一 十六 二十一 二十三
- 三十一 三十三 四十一

以上の數は最吉數でありまして、名又は姓名合數に有るときは、親より必ず成効して



非常な發達を爲し、商人なれば大資産家となり、官吏公人なれば大名譽を得、弟なれば資産家の養子となり、長男なれば家を起すと云ふが如く、隆々なる勢を以て大成効の運命を勝ち得る人であります。

(二) 幸運數

- 七 八 十三 十五 十七 十八 二十四 二十五
- 二十九 三十二 三十七 三十九 四十 四十五 四十七 四十八
- 五十二 五十七 五十八 六十一 六十三 六十五 六十七 六十八
- 七十三 八十一

以上の數は先きの最上幸運數に次での幸運數でありまして、名又は合姓名中に此數を現するときは、一生中に必ず一度は成効して家運を起すか、資産家となるか、又は大發明を爲すか、鑛山等の發見を爲すか、大名譽を得るが、必ず幸運命を勝ち得るのであります。

(三) 剛情數

- 七 十七 二十五 三十三 四十

以上の數を現す人は甚だ剛情の性質を帯びて自我心強く、且つ權威を好んで能く人々を争ひ、平和を破ることあり、故に此數の人は餘程此弊を慎ざれば不成功に終ります、又刑罰の災を受くることあり、故に剛情を良く利用せば發達し、惡しく弊に陥らば全く悲惨に終る人であります。

(四) 多情數

- 七 一七 一九 二五 二七 二九 三十三

以上の數を名又は姓名に現す人は甚だ多情でありまして、男子なれば藝者を買ふ、妾を持つと云ふが如く、女子なれば荒淫に流れて身持が悪しく、又姦通などをすると云ふ頗る品行の保てない結果となるのであります。

(五) 怠情數

- 七 一九 二六 二七 三十四 三十六 四十四 四十六

此數を名又は姓名の合數に持つものは、性來怠情ものでありまして、酒を飲む、錢遊びを好む、仕事が嫌ひで、誠に人間の邪魔者となるのであります、此内七劃は五行の關係の惡しき場合で、五行さへよれば、其怠情は無くなるのであります。

(六) 困難 數

四 九 十 十二 十四 十九 二十 二十二  
 二十六 二十八 三十四 三十六 四十四 四十六 五十九 六十  
 六十四 六十九 七十 七十四

以上の數を名又は姓名合數に持つものは、終身困難の人でありまして、亡身、亡家、發狂、宿痾等所謂る人生の悲惨事を繰返さなければ止まない人でありまして、假令一時は成効するも必ず兩三年を費して失敗し、晩年は家政亂れて、妻子離散する等の運命に陥るのであります。

(七) 遭難 數

五十四 五十六 五十九 六十二 六十四 六十六 七十四 七十六  
 七十九

此數の人は一生一度は必ず、火難、水難、盜難等を免れませぬ。

三 六 七 八 九 十 十六 十八  
 十九 二十八 三十三

此數も亦遭難で、劍難を免れない人でありまして、他の條件さへ良ければ其難は輕きも條件悪しければ遭難も一層甚しいのであります。

(八) 危險 數

名十 合姓名二十  
 名十 合姓名三十  
 名二十 合姓名四十  
 名三十 合姓名五十  
 姓十 合姓名二十  
 姓二十 合姓名三十九

之は大凶數でありまして、種々なる危險に遭遇して、非業に死し、盲目、白痴等の不具となるか又は思はぬ災難に遭ひ悲惨の運命の人となるのであります。

以上に於て運數の用を終りましたが是に注意することは、姓の頭字と名の頭字とが零數即ち十劃にて狭むことを嫌います、例すると

高田 一郎

の如く頭字と終字とに零數のある人は必ず、運命悪しく目的成就せず、人の爲めに損害せられて甚だ不祥の運命に終るのであります、故に姓の十劃には郎を用ゆることは出来ぬのであります。

### 第十章 鑑定實例

借愈々結論に到着しました、随分繁雜でありますから、鑑定の方法に就ては迷ふ方が澤山にあらうと思ひます故に、實例を擧げて鑑定の方法を示し且つ此姓名法が眞實に上來述べ来るが如くに的中するか否かを點檢する爲め、頗る公平なる方法に依り、現内閣の大臣諸公の姓名に依りて、一は鑑定の方法を示し、一は事實の研究に資しましょう。

内閣諸公のうち總理大臣の大隈伯は最早前章に例証して居るから、其項に譲り以下の九大臣に就て試みましよう。

- (一) 内務大臣
- 木○ 大浦 九
- 火○ 浦 十
- 土● 兼 八
- 水● 武

意義 大は易に大ナル哉乾元萬物資始となりて文字としては是れ程意義の深く用の廣い字は少いのであります、大は無邊と觀てよろしい、浦は説文に瀕也となり、又玉篇には水源枝三注、江海邊一曰浦となり、浦は瀕也となり、大なる水源を以て江海に注入ると云ふ、鳥渡面白いです。

兼武、兼は、説文に并也并はあはすと訓じます、語に乗は一禾を持ち兼は二禾を持つ  
 とあります、武は玉篇に健也一曰威也斷也とありて、剛毅、果斷に對する字で頗る怯懦  
 を嫌ひます、故に汲冢周書には剛強直理曰武、威強淑德曰武、克定二亂曰武  
 武、刑民克服曰武、夸志多窮曰武とあります、兼武の二字は即ち文と  
 武とを并せて持ち、剛勇果斷を以て天下の禍亂を定むると云ふ意で實に内務大臣の職務  
 を其儘に言ひ表して居るは頗る妙であります、陸軍中尉の武と文官の内務大臣とを兼ね  
 て居るところ、殆んど的中も是れよりの中はありますまい、殊に武は繼也とありて二度  
 の内務大臣を繼ぐのも亦名に表象せられて居ります。

即ち大浦兼武の意は大なる水源を以て天下を濡して民を養ひ、一面剛毅を以て民を刑  
 して民を服さしむると云ふ、所謂徳と健とを具備した名であります。

私は元より大浦子其人を知らざれども、子が農商務大臣の時には必ず五穀が豊作で  
 ある、其譯は子爵は毎朝天神地祇に祈りて、五穀豐饒國家安全を祈願せらるゝ、そんで、  
 其謹嚴なるは實に感佩のことである、子爵一人の力で天下の五穀は豊作になると言  
 はれざるも、其職にありて眞實至誠を捧げて祈らば神佛の感應のあるは禪に教育された

私は深く信じて疑いませぬ、其趣きが姓名に表象せらるゝも又實に不可思議で、意義  
 徹底の姓名と申さねばなりません。

五氣 大は火、浦は水、即ち火水の組合せで、活動第一の善良なる配合であります、  
 兼は木又土を兼ね、武は水で即ち土水の配合で之亦活動の配合であります、姓と名とを  
 總合せば水火の配合であります、即ち本法に於て第一位の五氣の活動で、子爵の活動振  
 が如何にも能く表はれて居ります。

天地 大は三劃にして浦は九劃であります、兼は十劃にして武は八劃であります。

姓の頭字を取るときは大の三劃と兼の十劃とは天地自然の配合となり兼は零數で  
 ありますから三の數が多くなるのであります、大浦の合數は十二劃で、兼武の合數は十  
 八劃でありますから、此點から云ふと天地は逆となりて惡ひ、然し私は頭字を配合す  
 るを以て適當と斷じた如くでありますから、矢張五行の關係も甚だよろしいと斷せねば  
 ならぬ、子爵が、上皇室を尊信し下部下を親愛するの表象を觀て亦適切なるを信するの  
 であります。

乾坤 大は●浦は●兼は○武は○即ち離乾坤となりて之は頗る惡ひ、離合集散は政治

界の恒でありますから、之のあるが當然かも知れない、亦他に理由があるかも知れませ

名數 名は十八劃でありまして「幸運にして權威を含む、立志せし事實徹せずと云ふことなしとあるから之も又子爵の運命を語つて居るやうであります、即ち中年までに目的を達して、身小官より出て、位人身を極むる親任官となり、子爵の榮位をも勝ち得るに至つた表象を窺ふことが出来ます。

姓名合數 三十劃であります之は二意がありて一は生れたときの名と改名した名との區別に依りて活用を異にします、若し大浦子が兼武を改名にて得たものなれば、第一の成効數となり、將來の大浦兼武なれば、大成効の人となるが、大困難の人となるかと云ふに險數となります。

以上にて於て大浦其人を明かに察知し得ると思ひます。  
(二) 外務大臣 加藤 木○火○木○木○  
五十九十八  
意義 加は玉篇に益也となり、増韻には施也、著也となり爾雅釋詁には重也とありま

す説文には語相増加也以ニ力口云々とありて折字法からは口の力又は力の口となりま

す、藤は説文に藟也今總呼草蔓延如藟者とあります、藟は「かづら」でありますから、草の蔓延して藟の如きが藤であります、藤の花が即ち藟の如くなるが故に藤と云ふのであります、加藤の二字は葛藤、即ちかづら、つたの種々なる問題が重なること云ふ意義であります、能く解すれば藟の延るが如く益すると云ふ意となります。

高明 高は説文に崇也とあり(崇は高貴也、又充也とあり)易に高謂三體一也とあります、又易に崇高莫大ニ富貴一となり、又天高而氣清と云ふて、高遠の意義があります、明は説文に照也とあり、あきらかど訓して易には日月相推明生焉とありて、文字としては、一點不祥の意義がありません、即ち高明とは日月の照々として高く天空に輝くが如き深遠の意義もあれば、富貴を崇びて、日月と推移する義もありません。

加藤高明の四字から云ふと、思想は高遠にして明智あれども、其高遠と明智とは常に雲の如く藟が纏り重ねて思ふ儘にならぬと云ふ義になります、何だか外交の妙趣が表れて居るやうで、且つ加藤子の無愛敬の爲め葛藤を起す義が表れて居るやうであります、五氣 は姓か木火又土火で頗る活動に鈍く名も木水で活動が鈍く土水となれば活動あ

るも敏腕を振 程ではありません、姓名合数の五氣は火水の活動があるも、又木火の不  
活潑があるから、活動不活動相半して、商切がしないやうであります。

天地 は姓の頭字の加は五劃で、名の頭字は十劃であります、天地の配合は頗るよろ  
しい、健康にして岩崎男の如き富貴の人の保護を受けて今日の位地を得しは誠に偶然で  
はありますまい。

乾坤 は○○●●の離れ乾坤で頗る悪い、男爵が人と親しますして無愛敬なるを表し  
て居ると申してよろしきか。

名數 即ち劃は十八劃にして大浦子と同様で又幸運數にして成効するの表象でありま  
す、姓名の合數劃は四十二劃にして、之亦大浦子の如く、改名にて得たる數なれば最上  
幸運數となり、始よりの姓名なれば善惡未分にて、富者なるときは其富は必ず正當の理  
由に依りて得たるものにあらざるを記憶すと云ふ芽出からの表象ともなるのでありま  
す。

要するに加藤高明男は名の意義は一点の申分なきも加藤の姓は頗る不祥にして、姓と  
名と相應せざるところに男の運命は存するものと断せねばなりません。

(三) 陸軍大臣 岡土 八五 市金 四七 之助金

意義 岡は説文に曰山脊也、市は説文に曰賣買所之也とあります、即ち多人數  
あつまりて物を賣り買すると云ふ、故に易曰日中爲市致天下之民一聚天下之貨と  
あります、之者説文出也、象艸艸過艸枝莖益々大有一所之とあり、又是也、往  
也とあります然し之は姓名に用ふるときは意義なき字でありまして、恰も燭之武、子之  
來と云ふが如く助字に見るを當然といたします、助は説文左也とあり左はたすくと訓  
じます、易天所助者順也と。

以上に依りて岡市之助の意義を求むると頗る困難でありまして、山の脊に市場の賣買  
を助くる男となり、山脊は陸軍には親しいから無理に言へば、陸軍の市場を助くる  
男とも言へぬことはない、然し決して意義徹底とは言へませぬ、何だか商人に適したや  
うな名であります。

五氣 は姓が土木を兼て名は金金金でありますから、餘り活動の人にもあらざれば、  
又健康體の人とも言はれませぬ。

天地は岡が八劃で市が五劃でありますから天地は順で之亦自然に發達し、上官の爲めに引立られ、下官を愛して上下一致し親睦して途中に波瀾がありません、増して合數十六劃からも亦天地の順でありますから之は甚だ良いのであります。

乾坤は○○○で幸運乾坤で頗るよろしい、即ち一生幸福にして目的を貫徹し、長壽を保つとの表象でありますから、此点に於ては天地の配合の悪しきと調和して餘りありと、言はねばなりません。

名劃は十六劃にして、最上幸運數であります、人の頭領とならねば已まぬと云ふ、名利ともに貫徹して大成功を爲す、最上の劃であります、此点から云ふと陸軍大臣となるは不思議ではありません。

合數劃も廿四劃の幸運數でありまして濡手で粟の掴み取と云ふ程に良い劃であります。

以上を綜合して判せば意義に於て軍人としては徹底せず、五氣に於ては不活動なれども乾坤と天地と劃數に於ては、最上幸運の成效を表象して居りますから、岡陸軍大臣亦幸運の爲めに、其職を勝ち得たと云ふが適當であらうと思ひます。

(四) 海軍大臣

水●土○火●  
八代六郎

意義 八は説文曰別也象二分別相背之形一とあり、玉篇曰八者數也とあります、代は正韻曰更也替也とあり又世也とあります、六は玉篇に數也とあり、郎は韻會其諸曹直曰郎とありますから、今の官吏と謂ふのであります、又郎は男子の通稱であります。

以上の意義を綜合して云ふときは、八世の六人目の男としか判定の仕様がありません然るに八を開と訓じ、代を城を開くと云ふか八代だと解する人があります、取捨は其人の自由に任せましょう いづれにしても、深い意義はありませんか、又悪い意義もありません。

五氣は姓か水土で、名が火火でありますから、其活動は實に確なもので、職の爲めに生命を捨てる位のことば厭はぬと云ふ表象がありて此點は申分ありません。

天地は八が二劃で、六が四劃でありますから之は天地逆で何だか、上官に對しても己れの意思を曲げず下官に對しても強骨で、上下和せぬ表象が見へます、殊に身体も餘り健康でなごい察せねばなりません。

乾坤は幸運乾坤で、無事無難に自然に名利富貴を全ふするところあるから之は誠によろしい。

名数は十四劃で困難數で才力金力に乏しく勞して効なしと云ふ頗るよろしくありません。

姓名合數劃は廿一劃の最上幸運數でありまして十六劃と名じく頭領數でありますから中年以後の活動は必ず幸運にして又人の頭領たるを表象して居りますから海軍大臣の職にあるも偶然ではないと言はねばなりません。

要するに八代海軍大臣は男らしき意義と、五氣の活動と、合姓名數に於ては最上なるも、天地と名數とが頗る凶數なるを以つて、中年までは思ふに任せざるも、中年以後は必ず成効せざるを得ぬ運命の人と斷じ得るのであります。天地和せざるが故に時に、上官の爲めに災を受くるようなことがあるかも知れない之は事實に徴しませう。

(五) 選信大臣

武は八十二時 富は八十一時 敏は八十一時

曰豊財也易曰富有謂之大業とあり、即ち富とは物の備はるを云ひ、財の豊なるを謂ひ、人に厚きを云ふ義があります。時は説文四時也とあり、釋名に時は期也とあり廣韻時者是也とあり、又春夏秋冬の四季を時と云ひます。故に禮記三月則成時とあります。又禮記天生時而地生財とあり、敏は説文疾也とあり釋名に敏者閔也とあり玉篇曰敏は敬也莊也とあります。説命惟學選志務時敏とあるから、時敏は此典據に命名せられたものと思ひます。

之を綜合して云ふときは武富とは文武備はり、財豊かにして四時を差別せず、務むるに敏捷なる意義でありますから、意義は明瞭であります。餘りに善ざる様であります。殊に武と財とに豊かなりと云ふが如きは、得易からざら姓名と申さねばならぬ。

五氣は姓が水水で、名が金水でありますから、性質至極温順にして、人と争ふが如きを好まず、且つ人に憎まるが如きことなく、君子人たるを表象して居ります。何だか紅木屋侯爵を観るやうであります。

天地は武は八劃にして時は十劃でありますから、甚だ和順を得て上下の和睦あり、敵なく上の人にも下の者にも愛敬せられて甚だ良き組合であります。然し合數のときには



天地の逆となりませんが、之は心配する程ではありません。

乾坤は●●○の遭難乾坤では頗る悪くあります、若し意義や、天地の配合が悪ければ必ず遭難を免れざるも、幸に他の條件が具備し且つ、温純にして敵なく、愛敬に富むから、此遭難は免るゝか又は軽くて事なきを得るでしよう。

名数は廿一劃の最上幸運数で又人の師となり、頭領となる最上劃であるから一點の申分はありません、姓名合数の四十一劃も亦幸運数にして、智謀衆にすぐれ大仕事を成就して、名利を全ふするところから、是程申分のないのはありません大浦子と双壁の全き姓名であります。

(六) 大藏大臣 若槻禮次郎

意義 若は説文擇菜也とあり、又敬順也とあり、汝也ともあり、又語勢を助くる字にも川ひて一定しません、概は集韻に木名堪作三弓材とありて、他に何の意義もない、禮は説文曰禮履也所以下事神致福也となり、釋名には禮者體也得其事體也となり、次は續也、即は男子の通稱であります。

之は意義全く不明と云はねばならぬ、若槻とは文字の儘で、禮次郎の、神に事へて福を致すと云ふが如きは全く神官の名と云ふより外ありません、又禮は體であるから、自分自體を次ぐ男で、いづれより云ふも全く意義不明であります、意義不明のものは如何なる運命に趨くかと云ふと、意義が不明なるが如く、其人も亦不明にして、常識の人にあらず、運命も亦不明にして頗る危険のものと断せねばなりません。

然るに現大藏大臣は之と反対で聰明にして理財に富み、敏腕にして頗る沈著で、日本の財政経済に精通するものは氏の右に出るものないと云ふ程で、全く意義とは反対であります。

五氣は總じて火金の組合せでありますから、其活動の力の強きと、意思の強硬なるとは間違のない表象であります。

天地は若は九劃で禮は十八劃でありますから、即ち天地の順で一點の申分はありません、合数から云ふときは二十四劃の三十四劃でありますから、之は天地の衝突となりて頗る悪ひ、然れども之は頭字に於て天地自然でありますから左程に悪いとは申されません。

乾坤は〇〇●●の配置で離乾坤となり、離乾坤は身体常に病弱でありまして又短命を表象し妻子と親しければ離れ、仲悪しければ病となり云ふ誠に不祥であります然し若し養子の培合なれば其害は軽いのであります。

名数は三十四劃で困難数となり姓名合数は五十八劃となりて之は幸運数であります、即ち中年までは頗る困難なりしも、中年後は發達を爲して安樂の生涯を終る表象となるのであります。

此姓名は意義徹底せざるを以て之を疑問の姓名とせねばなりません。

(七) 司法大臣  
尾崎行雄

意義 尾者說文微也となり、又尾末也となり、又底也となります、崎は說文險也、玉篇に崎者山路不平也となり、行は說文人之步趨也とあり廣韻適也、往也、去也とあり、去來自由で又增韻道也とあり、易には日月運行と云ひ、又臣之行也とありて頗る意義が多様であります、雄は說文鳥父也とあり、集韻牡也とあり、楚辭には雄々

赫々として勢盛なりと云ひ、左傳には寡心之雄也とあり武勇有る文字で、人物志には韓信是雄と云ひて人に傑出せる意義にも用いて甚だ深遠であります。

綜合して云ふと、尾崎は危険の底を踏で人生に立つと云ふ趣きがあり、行雄は傑出せる男子の面目を勢ひ盛に行ふと意になりまして、政治家と云ふ面目は確かに意義に表象せられて居ります、即ち政治家は危険の境に出入して主義の爲めには赫々たる勇氣を振はねばならぬ、尾崎氏の今日までの歴史は何だか此四字に言ひ盡せられて居りはしないかと思ひます。

五氣は姓が水木に土を兼ね、名は木火の組合でありますから、活潑とも不活潑とも言はれませぬ、即ち或時は非常に活動し或時は亦自重して動かすと云ふが如く、一定して夫れを貫徹するといふ勇氣には乏しいやうであります、然し此五氣の配合は却て中庸を得て極端に陥るの弊を救ふから、決して悪いとは申されませぬ。

天地は尾が七劃で、行が六劃でありますから、天地自然の組合で、餘り上下に敵を求むることはありますまい、又身體も健全にして不具の病氣にかゝるが如きは決してありません、合姓名の天地から云ふといづれも十八劃でありますから、天地の衝突となりて

家庭にも政治家としても離合集散を免れざる表象となり、之は頭字に於て和順を得て居るから左程心配するに及ぶまいと思ひます。

乾坤は○○●の離乾坤であるから、妻に離れるか持病があるか、同友と離別せざるべからざるかの苦辛を免るゝことを得ないのであります。

名數割は十八割で、即ち幸運にして權威強く立志せしことは必ず貫徹すると云ふ最も善き表象で一點の申分はありません、合數割は三十六割で之は亦最も悪い困難數でありますから、晩年には餘程注意せねばなりません、然し尾崎君も最早晩年でありますから、此表象の是か否かは將來に徴する外ありません。  
要するに尾崎君は意義に徹底し其他は混合の運命なりと断せねばならぬ。

(八) 文部大臣 一土木喜徳郎

意義 一者黃韻四數之始也物之極也とあり、又一者同也、純也とあり木者易曰取穀草木麗于土とありて即ち梅、松等の樹木と云ふ義、喜者釋詁曰喜樂也、玉篇曰悅也とあり、又語賀慶以贊諸公之喜となり、徳者廣行也とあり、説文升也とあり、玉

篇曰福也となり、莊子曰通天地一通者徳也とあり、郎は男子之通稱であります

之を綜合して云ふと一木は純平なる木訥の人と云ふことが出來ます、又一本の木なる木にして樹下を需す表象にも見ることが出來ます、喜徳郎は、徳を樂しみ、徳を行ひ、徳を悦ぶと云男子の意義にていづれに解するも姓の一木とは能く相應して意義も徹底して居ります即ち徳を樂しみ、徳を行ふ人は必ず剛毅木訥の人にして、然も天下の民を需すこと恰も樹木の地下を需すが如くで、誠に鮮明なる姓名と申さねばならぬ、此姓名の如くに其人に表象せられんか、文部大臣として實に適材適所であります、然のみならず教育者として能く徳を行ひ、徳を人に施して感化し得る表象であります、殊に一木氏の親父は二宮尊徳翁の衣鉢を禀けて徳高く、行直にして勸業を以て國家に盡して天命を全ふせられた方である、此親にして、此子の表象は誠に偶然ではないと思ひます。

五氣は姓は土木にして木は土を兼て居りますから、頗る温純の配合であります、加之名は木火でありますから、又自然的で姓の木訥には誠に調和を得て居る、蓋し教育家の如きは水火の如く大活動をするよりも木火の如く自然にして温平なるを最もよろしとせねばなりません、従つて此配合から言へば一木氏は温厚の人にして寡言、上下の人に對

して愛敬に富むと云ふことが推し得るのであります。

天地は一劃と十二劃であるから逆となり、姓名も亦五劃の三十七劃となるから、之れ亦逆であります、然し一は極數であるから、何數に對しても上位に居るから此點から言へば悪いとは申されません。

乾坤は○○○○の幸運乾坤でありますから、之はよろしい、即ち人生に波瀾なくして無事に目的の地位に昇り得るの表象であります。

名數は三十七の最大幸運數でありまして成効無比の幸運にして忠實克く衆望を擔ひ徳を修めて名門を博すべきものとありますから、誠に姓名の意義にも適して一層其善き表象となり、合姓名數の四十二劃は善惡相半ばした數で意義善れば善くなり、意義悪しければ悪くなる、改名の場合には殊によろしい數であります四十劃は元より悪いとは申されません。

要するに一木氏の姓名は満全なりと斷言し得るのであります。

(九) 農商務大臣  
河木野廣中

意義 河者釋名河下也、隨地而下、處而通流也、野者說文曰郊外也、又曰野、

是廣遠之處也、廣者說文曰殿之大屋也、玉篇曰廣大也、廣韻曰廣闊也、易曰廣大配天地、中は語に中央四方之中也、中は心也、中は内也、中は成也、中は成也とありて、用ひるところに意義を異にするは意義が多岐なるからであります。

綜合して云へば河野は河と野と云ふ義にて何の意義なきやうなれども、河野の二字は廣大無邊を表して居る河野三千里と云ふが如く、河あらざるところなく、野あらざるところでありません、廣中は廣闊なる天地に於て中道に處すると云ふ意義に觀れば河野廣中翁には頗る適中するやうである、純乎たる彼の人相と、篤實なる氏の行ひとは、小事に解脫して名利を漁る小人とは決して思はれない、翁が參禪に熱中して何物も是恧來に意氣悠悠たるところは無邊の大道にありて、中心を得た人で、能く意義を表象して居ります、然し政治家としては餘に漠然として、一主義を貫徹して政争の渦中に手腕を振ふる表象には乏しいとせねばなりません。

五氣の配合は姓の木土も名、の木火も誠に活動に乏しい表象で活動しても唯一時的で永遠に之を保つことが出来ませぬ、温厚なるところに發達すると云ふ君子人の表象であ

ります。

天地の組合は、姓の頭が八劃で、廣が十五劃であるから和順してよろしい、合姓名の天地は衝突して甚だよろしくない、然し第一の天地がよろしいから、之は左程の關係はしません。

乾坤は●○○で狭乾坤であります、狭乾坤は物の中央に立ちて双方より板狭みとなるが如く、病氣に身體を痛め、主義に進退窮るの状態となる等の出来こと生ずるのであります。

名数は十九劃で多性数となり、刑罰数となり、内外の平和を欠きて思ふに任せぬ運命の結果を來す凶數であります、合姓名数は三十八劃では平凡數でありまして可もなく不可もなく云ふ、用のない數でありますから善いとは申されません。

河野廣中翁の姓名は漠然として統一なきところが着眼すべき觀察であります。

## 第十一章 韻鏡の命名に就て

私は以上に於て天海僧正の姓名運命觀を説き終りましたが、此運命觀が果して完全無缺のものかと申すと、確に完全なるものとの答を爲すことが出来ないのであります、夫は何故であるかと云ふと、私は此の姓名運命觀の外に、韻鏡の命名法を研究しましたが、其韻鏡の命名法から觀察すると、天海の姓名法は決して完全なるものと答ふることが出来ないであります、否な本書は甚だ不完全にして、韻鏡の命名法が優れりと斷言し得るのであります。

すべて物は比較研究をしなければ、其物の眞價を知ることが出来ないものであります、本書の如きも本書のみを観れば甚だ至れり盡せりであります然れども之を韻鏡に比較すると、決して萬全と云ふことを得ないのであります、故に私は本書の完りにおいて、一言之を述べて、他に之に優れる姓名法あるを注意し諸君の研究を煩したのであります。

韻鏡の命名法は其由來するところ甚だ古代でありまして出版書も數十種であります。

命名に就て最も親切に説明せられたるは

韻鏡易解 五冊

之は元録四年の出版で眞言宗の僧、盛典と云ふ人の著述であります、盛典は更に正徳四年に

新增韻鏡易解大全 五冊

を著述して居ります、之は前書に更に註解を施して頗る丁寧親切に説明して居ります又正徳五年に誰れの著述かは未詳ですが

韻鏡袖中秘傳鈔 十冊

が世に公にせられて居ります、其説くところ、亦誠に親切であります、其外に韻鏡の書物は澤山にあり又寫本もあります、私が所持して居るものゝみにても二十部からあります、従つて古代は非常に研究せられたものであることを推し得るのであります。

韻鏡は決して命名専門の書ではなくて、文字の意義を明にする書で、韻鏡を知らざれば文字を知らずとまで断言せらるゝ程大切に研究せられたものであります、夫等は磨光韻鏡の下巻、韻鏡素隠を御覧になれば、直ぐ首肯することが出来ます。

韻鏡の命名法は如何なる法式に依るか、其要領のみを述べましよう。

(一) 韻鏡は其人の生年日の五行を中心とす

韻鏡の命名法は第一に、其人の生れ年と生れ日の納音の五行 即ち木火土金水を中心とするのであります、例すると

大正四年一月一日に生れた人を命名するには、先づ大正四年甲寅大溪 水性と生れ日の壬辰水性とを中心として、此年の水性と日の水性とを相應して五行の活動するやうに、命名するのであります。

其人が大正四年一月一日に生れたは、其人の本命で、此日に生れざるべからざる、公明正大なる運命の表現で、此一日は其人の人間として始めて社會に實在する日では程に大切な一日はないのであります、此一日に運命の連鎖あるが故に、生れたのであります、古來より誕生日と尊び、天長の佳節と國民の喜びをなすは、此一日が運命の主體なるからであります、故に此生日を中心とするは、此人の爲めに眞實運命の中心なるからであります、従つて此生年と生日の五行を主腦として、其五行を相助け、相應して運命を盛ならしむる文字、即ち名を撰擇して命名するが、韻鏡の式であります。

即ち一生使用する、名前の五行と、始めて世に生れたる年と日の、五行とを相生和合せしめ、其人の生年日の五行と名前の五行とを活動せしめて、運命の幸福を發動せしむるものであります。例せば

大正四年 甲寅大溪水性、一月 丙子水性、一日 壬辰水性

即ち水、水の五行本命となります、此人の本命の水水を中心として

清純 金 正 恭 季 健 木

等を命名するのであります、即ち清純の名は兩字金と年日の水とが、金生水の相生となりて、名は年日に和し年月も亦名に和して、兩々發達するのであります、季健の木に於けるも亦斯の如くであります、即ち韻鏡の命名法は、名と年日とを紐ぶところに真理が存在するのであります、誠に中心確乎なる命名法であります。

然るに此天海僧正の姓名法は、人を中心を定めず何年何月何日に生るゝも、ソナ事には頓着なく、唯姓名すら六ヶ條に適合するときは、夫れでよろしい、即ち中心がありません。

其人を中心とせず、文字のみを中心とするときは、人は文字の人にして、文字が主

體となり、人が客體となります、換言せば文字が中心となりて、人は文字の爲めの人と云ふ、全く主客顛倒の滑稽に陥らねばならぬ結果となります、若しも世の中に、人が主體でなくて文字が主體なりと言ふ人あらば、吾人の運命は一切名に左右せられて、人間と云ふ本質を失ふに至るのであります、嗚呼天下に斯の如き理がありまじやうか。

若し名が其人の運命を自由して、其人の本質に何等の關係なければ

百人の東郷平八郎を命名して百人ともに運命全しき東郷平八郎と云ふ海軍元帥が出來なければなりません、岩崎彌太郎男爵もあれば、岩崎彌太郎と云ふ、人力車夫もありません、全く是れ岩崎彌太郎にして、一は男爵にして日本の富豪となり、一は人力車夫と云ふ其日稼の勞働者なるが如き運命の區別のあるのは、何故でありまじやうか、若し運命が其人にあらずして、姓名にありとせば、同じ姓名の岩崎彌太郎は兩人ともに其運命を同じくせねばなりません、然るに天地月星の差の生ずるは、運命が其姓名にあらずして其人の本命の運命にありと断せねばなりません、即ち吾人の運命の本源は姓名よりも、其人具有の先天にありと申さねばなりません。

然らば姓名に運命の是非ありと云ふは何故であるか夫は姓名と天賦の運命と兩者の一

致したるところに存在するを云ふのであります、従つて、姓名は其人の運命を自由するにあらずして其人の先天の運命を助けて、發達せしめ、活動せしむる者と斷せねはなりませぬ、故に姓名は必ず其人の本命と連絡せしむるが當然であります。

其本命は何者ぞと言へば、此人間が天地に始めて呱呱の聲を擧げたる、陰陽自然の年と日を以て中心とするより、他に取るべきの道がないのであります、韻鏡命名法が其人の名を撰するに其人本命の年日の、五行を中心として之れに配合するに、五行相生の文字を以て結び、兩者の運命に密接なる關係を表象して命名する方法は、天海僧正の命名法の如く、其人を中心とせず、其年日の如何に拘らず、唯文字の意義、乾坤、天地、五氣等を以て撰する方法と比較せば、韻鏡命名法の優れるは誠に火を賭るよりも明かであります。

私は此點に於て天海僧正の此姓名法を排するのであります、否な此姓名法を研究する人は深く此點に留意して、文字のみを本位とせず、其人の生年生日を中心として、命名に遺憾なきを希望するのであります。

(二) 韻鏡の命名は意義正確なり

韻鏡は文字の意義を明にするが爲めの學說でありまして、意義を正すには韻鏡より外にはないのであります、先づ韻鏡の意義を明かにする方法を一言しましう。

康熙字典を釋きて、假りに純と云ふ字を見ると、純は常倫之切とあります、此反切の法は韻鏡から出たものでありまして、一切の文字に反切のない字は一字もありません、其反切を歸納と申しまして、常倫の二字は純の一字に歸納せらるゝのであります、此歸納が文字の眞實の意義となるのであります。

歸納と云ふは、歸は説文に女嫁なりとあります、又徐曰婦人謂嫁曰歸とありまして、婦人は生れて父母を以て家となし、嫁して夫を以て家となす、故に謂嫁曰歸、のであります、又廣韻には歸は還也とあり、増韻には入也とあります、即ち婦人は生れた家に住すして、夫の家に入るが本意でありますから、歸と云ひ、嫁と云ふのであります。

婦人が夫を持てば必ず子を産みます、婦人が子を産むが如く、文字も二字集れば、必ず子を産みます、例して云ふと、常倫の二字からは純と云ふ子を産み、兼武の二字からは矩と云ふ子を産み、副公の二字からは、豊と云ふ子を産みます、之を歸納と云ふので



あります。

一切の文字は此父母の兩字から産出されたものでありますから、玉篇なり、康熙字典を見るとき、何々の切音何とありまして、一字も此切字のないのはありません、即ち父母なくして子の出来る理由がないと同じであります、人と云ふ字は何から歸納されたかと言へば、而鄰之切音仁とあります、即ち人は而と鄰との父母より産れたので仁が人の意義であります、天と云ふ字は何から産れたと言へば、他前之切音とありますから、他と前とを父母として産れたのであります。

斯の如く一切の文字には其父母がありて、其父母より音が出るのであります、此父母がなければ文字の音の出る根本が無くなるのであります、之を歸納と申すのであります。

韻鏡の命名法は、此父母の二字に最も意義正しき字を用い、其父母より産れた子が又意義正しきを以て、始めて、萬物の靈長なる吾人の名に冠することを得ると云ふが主眼となるのであります、例せば

正純と云ふ字は、正は之盛之切音政とあり、君子大居正とか、剛健中正とか、正

は長也、備也、決也、常也、とありて、意義最も正しい字であります、純は常倫之切音、淳とあり、純粹不雜とか、純は精好也とか、純は大也、篤也、孝也とありて之又意義正しき字で二字ともに一點の申分がありません、即ち父母の二字は誠に純乎として正義に富む意義となり、此正純の二字から、ドンナ子が産れるかと云ふと、諄と云ふ頗る意義徹底したる子が産れます、諄は朱倫之切音とありまして廣韻には至也誠懇、貌とあり、莊子には恬淡無爲夫の嗥々を悦ぶとあり、(諄と嗥は同意)玉繩に諄者佐也とあり韻會には忠謹之貌とありまして實に趣味深き字で良い子を産で居ります。

斯の如く父母も子も一點申分なき意義の徹底したる文字の名が吾人々間の名となして始めて人生の幸福なる目的を達し得るのであります。

此正純を倒反すると、倒反と云ふことは、正純を倒に反すので、即ち純正として又悪い子が出来はせぬかと反して見るのであります、然らば倒に返し純正としてドンナ子が産れるか、即ち盛と云ふ、之亦一點申分なき子が産れます、盛はさかんなり盛大也、誰しも希望する字で、是程に意義深遠なる名は容易に得られません、唯名のみならず、趣味の上から研究しても誠に愉快なる文字即ち名であります、正純の五行は金金であります。

ますから、年の土性ど目の土性どの人に配合したら夫れこそ、錦上の花であります。

韻鏡の命名は斯の如く趣味があります

反之、元照、之は私の元の名であります、元照の父母からドンナ子が産れるか、即ち歸納すると韻と云ふ字が出る、韻は不安也とあり、倒反即ち照元と見ると韻となる、韻は首を断ると云ふことになり、元照の二字は頗る意義正しきにも拘らず、産れた子は、不安で、断首とは、是程に悪い字はありません、驚かざるを得ません。

由尙、尙は時亮之切音上となり、廣韻には飾也、加也、奉也、増韻には尊也とありて意義正しい字であります、由は干求之切音韻とあり、韻會に自也、行也、用也、善也、正也とありて最も意義は良い、然るに、此由尙の二字を父母として、歸納すると、囚と云ふ子が産れます、囚は、囚は、囚は囚人など申して、實にイヤな字であります即ち是等は名の字が如何に良とも劃が優れるとも、尊き人の名とすることは出来ません又囚などイヤなことです。

憲弘 憲は許建之切音韻とあり、憲は法也、表也、説文に敏也、語に文武是憲とあり弘は胡肱之切、爾雅釋詁に大也、疏に弘者含容之大也とあり、論語には人能弘道と

ありて、憲弘の意義は誠に正しいです、此二字からドンナ子が産れるかと云ふに、尊すと云ふ、即ち死の字が生れます、人生死ほどイヤなものはない、然るに自分の名に死の字を帯ぶが如きは誠に不祥と言ねばなりません。

斯の如く、文字の意義は二字の配合に依りて全く其意義を異にしますから、唯文字の表面のみを以て命名すると云ふことは絶対に滅めばなりません、恰も一人の生活のときど夫婦の生活と異なるが如く二字集れば一字の獨立の意義は轉せらるゝから此點に注意せねばなりません尙詳しく例してみましよう。

兼武 歸納 矩 倒反 瓊

此意義如何と觀察するに、兼武の歸納は矩となります、即ち兼武の二字が一字に歸納せられて矩と云ふ意義を産出するのであります、矩は爾雅に常也とあり又法也とあり又儀なりとあります、禮記に規矩之於方圓とありまして、方を正す、さしかね等を意味し又之を天地の方則にも用ひます、太玄經に天道成規地道成矩規動周營矩靜安物とあります、いづれより云ふも兼武の歸納は頗る正しき意義であります、名として一点の申分がありません、即ち兼武の二字も意義正しく、歸納も亦正しきが故に

此人の運命の正に堂々たるは一点争ふべからざる結論であります。

武夫 歸納 無 倒反 甫

武夫と云ふ字は二字ともに男子らしくて、誠に威厳があります、然るに之が歸納を視ると無となり、故に如何に武夫の文字が男子らしく意義あるとも、歸納が無の字なる以上は之を名として用ゆることは面白くありません、海軍中佐武夫將軍の如きは武士道の神となり國家の犠牲となり、長く國史に名譽を垂るゝは忠誠無二の至誠であります、武夫と云ふ名は遺憾なりと申したい。

正雄 歸納 終 倒反 脛

正雄と云ふ字も字其ものでは正しき雄となりますから、頗るよろしい、然るに歸納が終となるから、生れた小兒に終といふが如きは甚だ不祥で早死を免れんか生長するも成効は難きと見ねばなりません。

英雄 歸納 確 倒反 盈

英雄は才武絶倫の人を言ふので、語にも天下英雄惟使君與操耳とありまして、確乎たる典據もありまして甚だ良い名であります、歸納の確は字典に唯石の名とあるのみ

にて意義がありません、英雄を倒反すると盈とあります、盈は設文に滿器也とあり、満也、充也とありますから、名としては一点の不祥なく意義徹底と申さねばなりません。

韻鏡命名法では歸納の文字が石とか金とか松とか有形の意味の文字のときは倒反して其意義が正しく徹底せば又良いのであります、即ち歸納が、倒反に有形の文字があり、又無形の意義徹底したる文字あるを以て最も完全とするのであります、此英雄の如きも歸納が石なるも倒反が盈となりて、甚だ良き名となります。

至信 歸納 晋 倒反 屍

至信は劃も十五劃で、其意義も亦頗るよろしい、詩經に有至信之德一則感之とありまして、一点非難のない名であります、然るに之が倒反を見ると屍と云ふ、最も驚くべき字となります、僧侶などには差支なきも活動する人には名としては甚だ忌みます。

平治 歸納 丕 倒反 根

平治は孟子ニ欲レ平治セント天下とありまして、頗る意義は面白い、然るに歸納を見るとき根となり、丕とありて、誠に平々凡々の名となるのであります。

尙武 歸納 豎 倒反 上

尙武は杜市に此邦今尙武とありまして、日本男子として最も適當の典據で、誠に良い名であります、歸納の豎は韻會に貞也とあり、又字彙には直也とあり、豎は左右小吏どもありますが、倒反が上となり上は男とありますから、發達を表象して良い名であります。

以上に於て、韻鏡の意義の何物なるかを一言したつもりであります、韻鏡は獨り命名の研究で無くて文字あるところには頗る面白き表象を爲すものであります、私が韻鏡を研究するに時々歡樂の深いことがあります、一日大阪の二大新聞で無くて、日本の二大新聞と言はるゝ、大阪毎日新聞と、大阪朝日新聞を歸納するに實に其適切なるに驚きました。

### 大阪毎日新聞

韻鏡の判断では新聞の二字は通稱にして用いませぬ、大阪毎日の四字を更に、大阪の大の字と、毎日の毎の字とを取りて、大毎とし、之を歸納するのであります。

大毎 歸納 鐘 倒反 味

鐘は廣韻に常倫之切音純とあります、又徒對之切音隊とあります、廣韻曰鐘者樂器鳴之ヲ所以和之也とあり、又周禮には以金鐘一和之也とあり註鐘干也圖如確頭大上小下樂作鳴之與鼓相和とあり、晉語に戰以鐘干丁寧一徹其民也とあり、註に鐘干形如確頭與鼓相和、丁寧鉦也とあり、韻會に曰鐘者一說形如鐘有舌謂之鐘干とあります。

即ち鐘は一の樂器であります、此樂器は時の太平と戰時とを問はず、喜びと憂ひとに拘らず、必ず天下に鼓鳴するものであります、太平の時には天下の民を樂しめ戰國のときには天下の民を警しむると云ふ、恰も國家の羅針となすべき樂器であります。

大阪毎日新聞が純乎として一点私心なく、社會の木鐸となりて、正々堂々として恰も樂器の鼓に和して天下を覺醒する有様が、此鐘の一字に明かに表象せられて居ります、由來大阪毎日新聞は活動する新聞はありませぬ、活動寫眞を以て全國を擴張し、マラン競走、野球、慈善病院等恰も樂隊の活動するが如くに活動して一日も休止するところなし、然して其目的が純乎たる不偏不黨にありて、國家及國民に和するは毎日吾人の眼に視、耳に聴くとほりであります、然して、鐘の如く舌ありと云ふ一語に至つては

毎日新聞の正義正論の堂々たるを穿ち得て妙と云ふより外はありません。

すべて名は其運命を表象するものでありまして大阪毎日新聞が今日の如く世界有数の大新聞となりしは誠に大毎の歸納に依りても之を察知し得るのであります、即ち其名の運命と其經營とが、恰も樂と鼓と和するが如くに相應して成效を勝ち得たのであります、若しも大阪毎日新聞が老成し自重し、今日の成功に満足して、大尊既成に天下の新聞は唯我也と云ふが如く、活動せざるときは所謂歸納の表象と反對なる結果を來して、其運命に變遷ありと斷せねばなりません、私は大阪毎日新聞が、現在の如く鐘に舌ありと云ふ、天下の鬼神をも覺醒せる活動を以て、一貫せば、其前途や計るべからざる大成功を爲すを斷言するのであります、是れ大毎の歸納より來れる必然の結論であります。

昧は説文爽旦明也とあり、昧は晦、冥爽、是未明、謂之夜向晨、とありまして、即ち夜明けんとする時を云ふのであります、新聞事業が將に夜の明けんとする刹那活動を表象して、眞に適切であります、まして昧の低位には賣とありまして、其營業をも表象して居るは是程に面白く歸納せらるゝは殆ど不思議と云ふてもよろしいのであります。

### 大阪朝日新聞

大阪朝日新聞も矢張り新聞の二字を捨てまして、大朝朝日の四字とし、更に大の一字と、朝の一字とを取りて、之を歸納するのであります、平常でも大朝、大毎と申して居りますから、之が當然であります。

大朝 歸納 晁 倒反 帶

晁者直紹之切音肇となり、晁は古之朝字とありて、晁と朝とは同字であります、康熙字典に朝古文、晁とあります、晁音昭、説文曰、旦也、爾雅釋詁曰、朝、早也とあり、又曰、隋朝也、註、臣見君、曰、朝とあり、周禮春官、大司馬、春見、曰、朝、朝、猶、早、欲、其、來、之、早、とあり、王制曰、天子無事與諸侯相見、曰、朝とあり、又群守聽事、曰、朝とあり、禮記には班朝治軍、位官行法、非威嚴不行とあり、史記には日莫之後過市朝者掉臂而不顧とあり。

以上に依りて、大阪朝日新聞の歸納を観察しますと、先づ第一番に感ずるのは、大朝の二字が朝の一字に歸納せられて、表裏のないこととあります、然して朝は昭、即ち「あきらか」なりとありて、恰も明月の昭々乎として表裏なきが如き、清淨潔白の有様は

大阪朝日新聞の賢實にして一貫せる主義を証明して餘りありと申さねばなりません。

朝は早の如し其來の早きを欲すとは、誠に大朝の全身を露堂々せしめたるものにて、外國電報の早きことは東洋に於て、大朝なることは、一人として之を否認するものはありませぬ、獨り外國電報のみならず、内國電報も其經營の完全にして、其通信の早きことは日々紙上に吾人の實見するところであります、即ち大朝の今日の如く世界の新聞として東洋の覇者たるは、全く内外電報の他社よりも早急にして、其報道の確實なるより、天下に信用されたるものにして、其來るの早きを欲すと云ふ表象は誠に大朝の面目現成と申さねばなりません、現在に於ても大朝の抱負と確信は、即ち他社を凌ぎて其報道の早きを専有するを以て自認し一步も侵されざる用意周密の表象が不思議にも歸納に表はれて居るは妙と申さねばならぬ。

社會の木樨たる新聞その物が、其主義が明月の如く照々乎として一點の曇りなく、其通信が他社を凌ぎて早かりせば、新聞の目的は達したのであります、其紙數の増大するは亦必然の結果と申さねばなりません。

殊に朝の字は最も威嚴ある字でありまして、天朝とか、君に相見ると、一點野卑を含むまざるは、大朝の正々堂々として、朝野に威嚴ある所以と斷じてもよろしいのであります、いづれの點より觀るも、大朝の歸納、朝は其運命を表象して居ると斷じて、私の憶測にあらざるを確信するのであります。

大朝の歸納と、村山龍平氏其人の通信に全力を注ぎたる達觀と兩々相調和して、今日あらしめたものでありまして、假令運命の表象が如何に満足なるも、經營者其人が凡手にして、其表象に伴はざれば成功せざるや勿論であります、即ち名の運命と、經營者の着眼と一致して兩々相應するところに、運命は大々的活動を爲すものでありまして、命名規定の要も亦是に存するのであります。

以上に於て韻鏡の研究は頗る趣味あるものとの感想を喚起せられた方があらうと思ひます、尙是に一の問題があります、韻鏡の命名は必ず二字で無ければなりません、一夫一婦は天道にして、子は必ず一夫一婦によりて産るゝものであります、従つて韻鏡の歸納も二字で無ければなりません、今其理由を一言しましょう。

(三) 命名は二字を以て正確とす

諸君が支那、日本の人名辭書を繙かれたならば第一に不思議に感ぜらるゝは、皆な二

字の名前なる一事でありましよう、五字名も無ければ一字名も無く皆な二字名であります、源頼朝、徳川家康、豊臣秀吉、大石良雄等武士の名前は皆二字とあります、畏れられども、上皇室より神官、僧侶、書家に至るまで一切二字名なりしは、歴史の明かに証するところであります。

昔しは名は重きに置かずして、名乗を重じたものであります、大石内蔵之助は名で良雄は名乗であります、毛利彦左衛門元忠と云ふが如く名の外に必ず名乗を用いたのであります。

然して名乗は二字でありまして、名乗なき僧侶の如きは、名を直ちに名乗として二字以外には用いませぬ。

何故に名乗は二字に定めたものかと云ふに、名乗は韻鏡の歸納を重ずる結果であります、即ち二字にあらざれば完全なる名を得ることが出来ないのであります、殊に支那の如きは、一字姓にして二字名なるは古往今來一貫して今尚亂れては居りませぬ、斯の如く二字の名に定つたと云ふは、先きにも言へるが如く、二字にあらざれば完全なる名の意義を求むることが出来ないのであります。

古來は名乗のある人は必ず華印がありました、秀吉の書簡や澤庵、家康、良雄等のものには梵字の如き華印があります、此華印は即ち二字の名で無ければ撰することが出来ませぬ、華印はすべて歸納字を用いたものでありまして、正純と言へば諱の字を華印にしたものであります。

又二字の名を撰ぶと云ふことは、昔は現今の如く名が亂れずして、十五才になると元服と云ふて必ず名を改めたものであります、其名を改むるときには餘程注意したもので名を求むるに一の據りどころを得て命名したもので、或は易經に據るか、詩經の語に基くか、左傳に依るとか、夫れ／＼に注意を拂ふたものでありまして、畏くも御皇室におかせられては今尚、侍講が、典籍に依りて御瑞祥の御名を撰みて奏上し御裁可を得るのであります、斯の如く易經、詩經等に依るときは二字で無ければ完全なる字を得ることが難いからであります。

徳川時代には平民と士族とは階級が違ひまして、従つて命名にも全く區別がありまして、平民は名乗を用いず、治郎、太郎、助、左衛門と云ふが如く多く通稱を用いたものであります。

従つて韻鏡では治郎、太郎、左衛門は通稱として、無意義に見て何の注意も拂ひませ  
 ん、例して云ふと、時太郎と云ふ時は、唯時の一字にて判断し、平八郎と云ふときは平  
 の一字を以て、其適否を断じたのであります、即ち平民には治郎、太郎は通稱となりて  
 一般に習用し來つたのであります、故に一字には歸納なきが故に、左程に命名には注意  
 を拂はざりしも、武士の名乗となれば必ず二字として甚だ尊重したものであります。

然るに明治以後となり、士族平民の區別を認めざるに至つて、名も亦頗る亂れて現在  
 では命名には一定の方針がなく、唯父母の思ふ儘に勝手に命名して、一字名もあれば、  
 三字名もあり又昔しの通稱の太郎、治郎もありて、殆んど暗中摸索の有様であります、  
 然るは突如天海僧正の姓名法が世に公にせられて、一犬嘘を吼へて萬犬實を傳ふるに  
 至つたのであります、然して天海の姓名法も亦一點の方針が無く、太郎も治郎も、三字  
 も一字も、唯六ヶ條に適合すれば完全なりとして、意義の如きは全く夢中の説夢と云ふ  
 有様であります。

私は名は必ず昔の名乗の如く、二字を以て正確とし、此二字の意義も、歸納、倒反も  
 一點申分なき名を得て、始めて吾人靈長の人の名たるを得ると信するのであります。

人に依りて名はナンデもよいと申す人があります、然し馬鹿と言はれて立服もせず、  
 糞といはれてイヤの感想の起らない人は知らず、花を觀て美と感じ、目を見て悠々の感  
 を生ずる人あらは、自分の名の洞然明白として、いづれより觀察するも一點の汚れなく  
 運命も亦是に伴ふて幸福ならんか、之を望まずと云ふは、人として常識の人にあらすと  
 言はねばなりません。

私は普通の喚名としても、又文字の配合としても、二字を父母とし、其父母より産れ  
 たる子をも研究して、人生六七年自己のものとして處用するは決して悪きことにはあら  
 ずと信じます、況して、名が運命に伴ふに至つては、幸福と健康とを欲するもの、研究  
 せざるべからざる、必然の問題なるからであります。

故に名は必ず二字名と云ふ、古今を一貫したる歴史の事實に安心して、韻鏡より歸納  
 したるものを命名すると云ふ方針のもとに研究せられんこと一言するのであります。

現今は戸籍法が嚴重で容易に改名を許しませぬから、惡しき名の人古代の如く名の  
 外に更に名乗を作りて、之を實印に彫りて責任ある場合に用い、且つ平常に名乗を用ゆ  
 るときは、運命は必ず轉換せらるゝものでありますから、其方法を取ることがよろしいので



あります、詳しくは拙著「實印と運命」に述べてありますから、有志の方には進呈しますから御一讀ください。

(四) 韻鏡と姓の関係

韻鏡の命名法では、姓を用いませぬ、之は天海の姓名法とは全く根本を異にして居ります、何故姓を用いないかといふに。

孟子が盡心の下篇に諱名不諱姓、姓所同也、名所獨也とありて、姓は人々生れた時に命するもので無くて前から有ります、又一家に八人あれば皆な同じ姓でありますから、之は諱むべきものでない、然るに名は生れると同時に唯其人獨りの爲めに命するから之は諱ねばならぬといふが孟子の説であります、韓退之も諱辨に之を引用して姓の諱むべからざるを論じて居ります、即ち此點に於て、姓は運命に關係なきものと斷じて居ります、

名が運命に關係するは、此人唯一人でありまして、呱呱の聲を擧ぐるや直ちに命名せらるゝから、其命名の是非に依りて運命に吉凶を生ずるから命名に深き注意を拂ふは當然であります。

然るに姓は前から有るから、之を改むることも出来ざれば、惡いからと云ふて取替ふことも出来ませぬ、殊に姓には無意味なものがありて到底意義として研究の出来ないのがあります、故に韻鏡に依りて命名する人は大抵は姓を用いませぬ。

又姓を用ふるにしても最も困難なることがあります、長男一人の場合なれば他に行ないから、夫れで宜しいが若し、五人もありて五人ともに、姓と名とを運命に紐ぶるときは養子して他家を繼ぐ場合には、姓が異なりますから勿論運命が異ならねばならぬ結果になります、殊に女子の如きは他に嫁するを以て本義とし、其家に居らざるを當然とします此場合に女子にも、姓と名とを紐ぶるときは、女子は其姓の家に發達して他に嫁することの出来ない結果となります、女子が生れた家に發達して他に嫁すことの出來ないのは良縁がないので、女子として是程に不幸はありません。

吾國では昔は平民に姓氏は無つたもので、士族か郷士で無ければ許されませんでした故に何屋何兵衛とか、茜屋半七とか云ふて、屋號を用いたものであります、其証據に昔の庄屋証文には、姓氏と云ふ者は大抵ありません、五郎右衛門、八兵衛と云ふが如き名のみであります、維新になりて始めて士民一般に姓を冠する様になつたのであります、

況んや婦人の如きは姓氏を用ゆるが如きは一切ありませんでした現在でも婦人の姓を用ふるは、婦人之れ自體にあらすして、夫の姓を用ふるのであります、又生家の姓を用ゆるのであります、即ち附隨と言ふてもよろしい。

婦人が獨立して姓を名乗るが如きは、家庭の不祥の結果で後家の場合か、妾宅の場合で決して運命上良いことではありません、故に婦人が生れると同時に、姓と名と紐ぶが如きは、根本の誤りと申さねばならぬ、即ち婦人は唯名のみを正して、姓の如きは行き先の夫の姓に任すを以て本義とせねばなりません。

以上の説に依りて私は長男は兎に角、次男以下婦女子は名のみを正して、姓を用いず、將來自由に發達せしむるを當然と信じます、況んや天海の姓名法でも、姓名合数は晩年とあるから、小兒の時に姓名を紐りて、終身を縛るは其發達を妨げると言ふてよろしいのであります。

又孟子の説の如く、姓は他人數と同じくするものにて、獨り専有するもので無いから運命の如く其人のみの活動を説くものに、共通を離へるは甚だ穩かならぬこと、思ひます、故に私は長男の人か、其姓を終身繼ぐ人に限り、姓名と紐ぶを可とするも之を一

般に適用するは、甚だ無意味なりと信するのであります。

韻鏡易解の著者、盛典は姓名の運命鑑定として之を紐で判斷を爲す方法を説いてあります、之を例すると、大隈重信と云ふときは、姓の大隈の大と名の重信の重とを取りて大重の二字を父母として歸納するのであります、田中菊治郎と云ふ時は、田と菊の二字を取りて歸納するのであります。

大重 歸納 大 倒反 重 田菊 歸納 逐 倒反 堅

斯の如く姓と名とを連結して、其人の運命を研究するは頗る面白い觀察法であります然し韻鏡秘中鈔の著者は之を笑ふべきだと反對して居ります。

私は若し姓名を連絡するならば、斯の如く連結して研究するを以て天海に優れりとし亦甚だ趣味深いと思ひます、然し命名に之を應用するは容易ではありません唯姓の變らない人が、將來改めない人の觀察法たるや勿論であります、之は參考までに記して置きます。

いづれより云ふも天海の姓名法の、姓と名の意義と云ふは、空漠なるもので用ゆるが是か非かは甚だ問題とせねばなりません、私は孟子の説に眞理ありと贊することを一

言して置きます。

(五) 韻鏡の命名と劃數

私の實驗に依ると、天海の劃數は八十一條もあり其運用が頗る巧妙でありますから、劃數は甚だ優つて居るやうであります。

韻鏡易解では根本を八卦に依りて

- 一 乾 天長地久 二 兌 唇舌紛爭
- 三 離 南陽長命 四 震 高命大風
- 五 巽 立身出世 六 坎 貧賤不足
- 七 艮 富貴高名 八 坤 遭難病弱

と斯の如くなつて居ります、八以上は八で拂ふから十三劃は立身出世劃となり、十七劃は天長地久劃となります、此取方から云ふと十二劃は高命大風劃となり、三十劃は貧賤不足劃となりて、天海のとは一致するところもあれば、又反對するところもあります。韻鏡秘傳では、始から劃數は眼中に置いて居りません、即ち用いないのであります。八卦を以て劃數とするのも勿論一理はありますが、其應用範圍が頗る狭くて、到底八

十一條に比すべきではありません。

八十一條は何に根本するか少しも説明がないから不明であります、實驗するところ大に面白き表象がありますから、私は劃は韻鏡と調和して用ゆる方針にして居ります、然し姓名との合數劃は勿論、長男か、不變の人にあらざれば用いないのは、姓は紐ぶものにはあらずと信するからであります、取捨は實驗に任せて諸君の研究を希望いたします。

(六) 五氣及び天地、乾坤

五氣は韻鏡は先きにも言へるが如く、其人の生年と生日との五行を中心として、其五行に相生する六字を以て、生年日の本命の五行とを両々應用して活動せしめますから、天海の姓名法の如く、唯文字の五行のみを以て活動を説くとは月籠の差で、此点に於ては韻鏡の優れるは、先きに述べた通りであります、誠に五氣の配合に、水火の如く相尅の活動を以て本體とするは、根本の誤りでありまして、水火の活動の如きは、唯一時的にして水火活動して、後に水も火も其活動を失ふ結果となります、自然に反するもの、長く持續せざるは理の當然であります、韻鏡の如く、水生木、木生火とするときは、天

地自然の道にして、假令一時の活動なきも自然に發達し成熟するを以て、運命の如く自然を説くものは自然に順ふて活動するを標準とするは運命上の通則でありますから、私此点に就ても此天海の姓名を排斥するものであります。

以上に於て、姓名法の比較を爲して研究の資料に供したつもりであります。

命名は二度すべきものにあらず、名は實の實にして、人生に寸時も離るべからざるものであります、況んや運命の關するところ、生死、富貧を左右し、健康と病氣とを喚起し、人生の吉凶禍福、又名に關するや重大であります、故に子孫の爲めに、充分是非を研究して、家庭の圓滿なる人生に活動せられんことを希望するのであります。

韻鏡に就ては他日詳論する時期もあらうと思ひますが、唯命名に就てなれば

韻鏡易解 五冊

韻鏡秘傳袖中鈔 十冊

の一部と、磨光韻鏡の二冊あれば、普通の教育ある人は直ちに、歸納を覺ることが出來ますから、研究せられんことを一言いたします、然して此天海の姓名法とを比格して其是を取り、其非を捨てば完全に於て愉快なる、名を命することが出来るのみならず、銀

行、會社、其他のことに就て趣味ある研究を爲して、運命の表象するところに一種いはれの妙味を感ずるものであります、進で研究せられんことを冀ふ。

368  
373

昭和十年五月廿日印刷  
昭和十年五月廿五日發行

定價金六拾錢

不許  
複製

著作者

大阪市浪速區元町二丁目一〇六  
榎本進一郎

印刷者

大阪市住吉區天王寺町三三九六  
田村政次郎

印刷所

大阪市住吉區天王寺町三三九六  
榎本印刷工場

大阪市浪速區元町二丁目一〇六

發行所

會社

榎本書店

電話船場一六三  
四八二番

終

